



269号
新宿発

参院選をたたかつて

内田洵子／岡崎トミ子／岡崎宏美／栗原君子

黒岩秩子／清水澄子／竹村泰子

死者の追悼と小泉改革

ノーマ・フィールド

参議院選をたたかって

- 大激戦を競り負けて 内田洵子 鈴木勢子 2
 女性パワーが逆風を追い風に変えた！ 岡崎トミ子 大槻壽子 8
 完敗しました。だからこそたたかいは続けます。 岡崎宏美 松永宏美 12
 「倒れてもやまず」闘い抜きます 栗原君子 室本けい子 16
 冒険の道を選択 黒岩秩子 斎藤千代 20
 平和、女性、人権、環境のための
 たたかいは、やめません 清水澄子 津和慶子 40
 かく戦えり。されど…… 竹村泰子 中島和子 51

資料 目で見える女の状況1 政策・方針決定過程への女性の参画(1) 52

講演録

死者の追悼と小泉改革 ノーマ・フィールド 54

あごら読書室 『祖母のくに』ノーマ・フィールド著 77

TOPICS 靖国参拝に怒りの声／米軍艦が四市に二斉入港／保育所の企業化？ほか 78
 集会から 靖国参拝抗議集会／世界人権差別撤廃会議／リブ合宿 82

語りかけたいあなたへ 今、Eメールが面白い 大里知子 86

あごらのあごら 88

前回・前々回より減った 女性の当選者

小泉ブームを反映して空前の高投票率になるだろう、とアナウンスされた第十九回参議院選挙は、意外にも投票率五六・八八%、史上第三位の低投票率となり、自民圧勝。参議院でも与党が安定多数を占めることになった。女性の投票も前回の五九・二八%から五六・八八%に大きく後退、女性の当選者は減った。

参議院の女性の立候補者数は、五二ページの図のように、八三年以来目ざましい上昇を続けてきた。今回も、前回(九八年)の一〇名に対し一三七名と、二五%もの増加となり、候補者全体に占める比率も、過去最高の二八%に達した。しかし、当選者は、選挙区七名(自三、民二、公一、自由一)、比例区十一名(自五、共二、民一、公一、社一、保一)の計一八名に過ぎず、一五・九%から一四・九%に減少した。

今回の選挙直前、自民党の強引な主張で、参議院の比例区は拘束名簿式となったが、当選した女性議員の四四・四%を自民党が占めたことを見ても、この新制度が、大組織にいかにも有利かを示している。経験を積み、まさに働き盛りの革新系女性議員のほとんどが落選したのは残念だった。

前号で「護憲派」として支援した(あこらメイト)も、残念ながら一当六落、(メイト)の国会議員は、かつての九名が三名に減った。しかし敗れたとはいえ各地で善戦した(メイト)の周りには、新しい人の輪も生まれ、護憲・平和・人権運動に取り組んでいる。その奮戦記をご紹介する。

米国へのテロ攻撃を契機に「報復戦争」が正当化され、「同盟国日本」の憲法改悪が具体的に進められようとしている今、どのレベルの選挙にも、衆知を尽くして私たちの代弁者を増やし、「痛みは庶民が負え」をはね返し、「日本が再び戦争に加担すること」を、なんとしても防ぎたい。(編集部)

大激戦を競り負けて

新潟選挙区 内田洵子



平和憲法が危ない！ 教育基本法が危ない！ 基本的人権や労働権、男女平等も含めて、憲法の理念が総決算されようとしている政治情勢に、強い要請を受けて立候補してから九か月の選挙戦でしたが、残念ながら惜敗しました。支援してください（あごらメイト）の皆様のお心を生かすことができず、本当に申し訳なく思っています。

私の選挙区は二人区に男性四人（自民党公認、同推薦、民主党、自由連合）、女性三人（共産党、自由党、私Ⅱ社民党）の大激戦で、全国的に注目されていました。

結果は別表のとおりです。

小泉旋風と前回の落選をバネに、自民公認の大勝は公示前から予想されていましたが、二議席目を四人で争う構図の中で、「若さと子育て真最中」をキャッチフレーズにした森裕子さんに、



私が競り負けてしまいました。

森さんは、町議経験二年という政治経歴のなさが、逆にフレッシュに受け止められたのでしょうか。フルートでのミニ集会や終盤での喜納昌吉さんを迎えてのコンサートなど、自由党新人ですが、無党派風選挙を展開し、若い女性票だけでなく、活動する無党派の女性票も集めたのが勝因といわれています。

一方、私のほうは新潟市議十八年、女性初の副議長、新潟県の女性議員の会を呼びかけ、事務局を担当して、副会長をし、市の女性政策や（北京JAC）の活動などにかかわって来ましたが、私の訴えや活動実績は、地味に見えたのでしょうか。

最後まで「憲法九条が危ないのです。参院六年の任期の間に必ず国会で改憲が議論される場に居させて下さい。反対させて下さい」と訴えていたことも、無党派の人びとの票を集めるには逆効果だった。もっと構造改革の具体的方向や私の福祉の具体的活動をわかりやすく訴えるべきであった、という声も出て来ています。確かに今の選挙では、イメージ、わかりやすいキャラクターとキャッチコピーが人びとに受け入れ

られる大切な要素なのでしょう。

森さんと私では、同じ女性でも、憲法九条はもちろん、教育、男女平等(共同参画)など、言葉は似ていても、意味することはかなり違っているのですが、深い政策論議にならなかつたのが残念でした。でも今までしてきた教育・環境・福祉の各分野の方や女性議員の有志の女性たちが、県下で応援して下さったことは、大きな励みであり、心から感謝しています。

私自身は連日、朝から夜遅くまで、挨拶回りや会議への出席で、まだまだ選挙の続きのような日々です。後始末が終わつたら、議員の仕事は無くなりましたが、それ以外で今まで続けて来た活動(北京JAC)や児童福祉活動、福祉事業を通しての介護保険の見直し運動など、友人たちと活動していくつもりです。

これからも(あごろメイト)としてよろしく願います。

都市部で逆転ならず

内田さん 笑顔で支持者にお礼

「だめだったか。悔しいな声もれた。手にしたね。悔しいね。」内田洵子さんの落選が決まった午後十一時四十四分、新潟市新光町の社民党県連に詰めかけた、約六十人の支持者から絞り出すよう

「だめだったか。悔しいな声もれた。手にしたね。悔しいね。」内田洵子さんの落選が決まった午後十一時四十四分、新潟市新光町の社民党県連に詰めかけた、約六十人の支持者から絞り出すよう

「だめだったか。悔しいな声もれた。手にしたね。悔しいね。」内田洵子さんの落選が決まった午後十一時四十四分、新潟市新光町の社民党県連に詰めかけた、約六十人の支持者から絞り出すよう

前、友人たちがこの目のために選んでくれた、ブルーのワンピースに白いジャケット姿で事務所入り。速報が伝わるたびに、順位が入れ替わり、事務所は一喜一憂を繰り返す。前回、接戦を勝ち抜いた大潟稲子参院議員は「心臓が悪いね。でも都市部で逆転できる」と三年前の再現を願った。

「本心に素晴らしい戦いだったよ」と涙であいさつする女性支持者。内田さんは「泣かないで」と一人、笑顔で戦いを終えた。

「本心に素晴らしい戦いだったよ」と涙であいさつする女性支持者。内田さんは「泣かないで」と一人、笑顔で戦いを終えた。

(二〇〇一・七・三〇 新潟日報より)

政策よりもルックスとムードで動いた参議院選挙

〈内田洵子さんと国会へいこう会〉 鈴木勢子

新潟選挙区は、自民党候補者の独走が終始伝えられる中で、残る一議席を争う横一線の激戦でした。開票の結果は、「子育て真つ最中、四十五歳の若さ」を強調し続けた、自由党の森裕子候補に迫り上げられ、平和憲法を守り抜く内田洵子さんは惜しくも次点に。まさかの残念な結果となりました。

上越地域では県内でもいち早く、これまで女性問題を学び合った人や女性議員らが呼びかけ人となり、勝手連（内田洵子さんと国会へいこう会）を立ち上げ、上越地域を中心とした支援を展開してきました。

四月には新潟市で、〈女性議員を増やそうネットワーク〉主催の、三人の女性候補者の公開討論会が開かれました。教育や原発・憲法問題については、内田さん（社民党）と桑原さん（共産党）の二人には大きな違いはなかったものの、森さん（自由党）のこれらの点についての発言には、問題意識の違いからか、発言の貧しさに、女性として残念に受け止めました。とくに教科書採択について〈新しい歴史教科書をつくる会〉を擁護する発言には、自民党よりも右寄りの怖さを感じてしまいました。この公開討論会により、女性問題を取り組む人たちには、内田候補者の思いが、より鮮明に伝わってきました。これを機に、勝手連も政策の違いを明確にし、活動がしやすくなりました。六月には上越市で、『国も地方も女が出番』をメインテーマに、黒岩秩子参議院議員と内田洵子さんとの「痛快トーク集会」を開催、『戦争の世紀から、平和の二十一世紀へ』と、参加者に訴えました。

しかし、選挙戦の終盤、無党派層を巻き込んだ「若さ」を訴える森候補の追い上げに、私たち勝手



内田さんと黒岩さんとのトークに会場は沸きに沸いた

連は危機感を抱き、どんな結果になっても自分たちの地域では、「内田票」が「森票」より一票でも多くなることを目標に動き、もし、今たまたかわなければ、これまで何のために学んできたのが崩れてしまうということを確認し合いました。

開票の結果、内田さんの知名度のない上越地区の二十二市町村のうち、三村を除く十九市町村で、森候補を上回る票を獲得していました。これは活動の成果であり、護憲平和への願いが日一日と浸透し、票につながっていた証でもありました。一方、選挙終了直後には、同じ上越地区で、森候補派の運動員四人が買収容疑で逮捕されるという、旧態依然の金権選挙の醜さが露出し、公選法の連座制が問われる結果となりました。

今回の参議院選挙はマスコミが作り出した「小泉旋風」が、候補者らの政策の中身を見えにくくし、「言葉ならべ」と、ムードに振り回された新潟選挙区でした。この選挙では、これまで世界女性会議などへも参加してきた女性たちの一部が森支援に回り、「学習のあいまいさ」をはしなくも露呈しました。国政につながる政党候補者を見抜くことなく、「若さ」とムードに酔いしれたことは、今後の課題として残っていくでしょう。しかし、ほんものの学びが「骨の髄まで届いていく」その時に、明るい展望が開けることも、惜敗の中から見えてきた大切なことであります。「次」を目指して、私たちは憤りを必ず勇氣に変えていきます。

女性パワーが逆風を追い風に変えた!

宮城選挙区 岡崎トミ子

十七日間の選挙戦を振り返ってみると、小泉旋風という逆風と強烈な暑さとの闘いだった。多くの女性が逆風を追い風に変えるためにパワーを発揮してくれた闘いでもあった。選挙戦後半に世論調査の結果を伝える新聞記事が私の状況を伝えた見出しは「女性に浸透」だった。闘いのなかで出会った、それまで一面識もなかった多くの女性たちの姿が鮮明に残っている。食堂の双子の女性経営者は店頭の大きなピンクの桃太郎旗を抜いて、二人で大きく左右に振って「トミ子、がんばれ〜!」と応援してくれた。家から裸足のまま飛び出してきた「絶対、あなたを落とさない! 私、頑張るから」と選挙カーに叫んでくれた女性もいた。夜九時過ぎに選挙事務所に戻れば、「今日、三十人に電話をかけた」「今ちょうど、百人の支持を固めた」と、それぞれに電話の向こうで興奮気味に話してくれた女性たちもいる。私の見えないところで大勢の女性たちが勝手連的に動いてくれていることを実感した。勝利した後も、街頭で「二十歳で最初の投票を岡崎さんにしました」、「おめでとう、がんばってね」といった声をいただいた。昨日も「若い」「女性二人から、「マジに、チヨ一応援してる!」と声をかけられ、幅広い女性のがんばりと勢いが当選にむすびついたことを、あらためて知らされた。実際に投票率をみると、特に仙台の女性の投票率が前回の五一・三六%から五六・〇%と、四・六

四ポイントも上がっていて、前回より四万人を超える多くの女性たちが投票所に足を運び、唯一の女性候補者であった私を勝利へと押し上げてくれたことが、数字でも示されている。

さて今回、宮城選挙区では、自民党公認・推薦のふたりの候補者との三つ巴の闘いが最後まで続いた。

「自公保連立政権がなに」ことにつけ「政治は力」、「政治は数」とばかりに押し切ってきた政治状況を、宮城の地でなんとしても食い止めるために、「トップ当選でなければ負けだ、ましてや自民党が二議席を占めることを許してはならない」と考えた。八割を超える小泉内閣の支持率に立ち向かう方法は、たったひとつ。三年半、休むことなく続けて来た参議院議員としての活動、九〇年に衆議院議員に初当選してからトータルで十年の国政での実績をパフォーマンスなしで地道に訴えること。ポスターにも「循環分権社会を指し」と書き、環境委員として力を入れてきた「循環型社会」の形成

宮城 岡崎さん 自民独占阻止

熱に浮かされたように「改革」が叫ばれた、二十九日投票の参院選、全 なたた宮城選挙区（改選数二）は、民主黨前職の岡崎トミ子さん（まじ）がトツ国的に「自民寄り」の強風が吹く中、前職、新人にまさしく三つどもえの激戦と、自民系議席独占を阻止。「民主王国」の面目を保った。



と、地方主権を唱えて取り組んできた「地方分権改革」について、その何たるかを丁寧に訴えることが大事だと心に決めて戦った。

小泉首相の構造改革に対して、全国の首長から「地方切り捨て阻止」の声が高まっていた。「まず補助金と地方交付税の削減ありき」という小泉改革は、確かに薄っぺらな地方切り捨ての議論だ。私は地域のエネルギーを再生する分権改革を力強く訴えた。求められているのは、権限と財源を地方に移譲し、住民の監視の目と意見が直接とどく自治体が、自らの権限と責任で住民のニーズを反映した政策、税金の使い道を決定できるようにすることだ。

さらに、本当に市民の利益に合う構造改革を進めるためには、女性の目線を大事にして、女性が中心に担ってきた子供や教育、お年よりの介護、自然、環境、ゴミ問題などを表に出してこなくてはならない。

そういう構造改革を、これまでの「父ちゃん改革」に対して「母ちゃん改革」と称し、どちらも市民の皆さんと一緒に取り組みたいということをし、こつこつと、まじめに訴えた。

九六年の総選挙で落選して一年、参議院補選に立候補することを決めると、地元（あごら）の仲間がすぐに励ましに来てくださった。また公示日前に東京からも斉藤千代さんから編集部の皆さんが檄文を携えて訪ねてくださった。あのとときの感激を忘れることはない。

アナウンサー時代に『あごら』を手にすることによって多くの女性たちの闘いを学んだ。女性たちの闘いの歴史の延長線上に私の当選があることを確認した。五回の国政選挙、苦しくない戦いはなかったが、今回はもつとも苦しい戦いだった。この戦いを忘れることなく、六年間、重い責任をはたすべく、働いていく。

これから女性。女性の分野で実績を。

大槻壽子

私が初めて岡崎トミ子さんに会ったのは一九七八年の春闘のとき。私の所属する組合に、アナウンサーだった岡崎さんが同僚で親友の小野祐子さんと一緒にみえたのだ。岡崎さんはすでに女性労働者の問題、冤罪事件、環境問題など、多くの闘いに関わっていた。「男女差別定年」に直面していた私に、お二人は「ひとりでしなさんな」と、組合と闘うことを勧めてくれたが、組合の仲間は「裁判なんかしたら大変だぞ」と暗にあきらめることを促すばかりだった。

結局私は個人で八年間に及ぶ裁判を始めたが、岡崎さんたちはやはり個人の立場で、ずっと支援してくれた。途中、私の会社の社長が会長となり、同じ系列で岡崎さんたちの会社の社長を兼ねることになったときには「岡崎さんたちが難しい立場になってしまったなあ」と心配したが、ご本人は「困ったな」と言いながらも、はははと笑いながら変わらな力になってくれた。アナウンサーが、組合としてでなく、個人として自分の会社の社長を相手に闘うのは大変なことだ。びくともせず、支えてくれたのは、岡崎さんが常日頃から社会に目を向けていたからだ。憲法が男女平等を掲げながらも実際には差別がまかり通っていたなか、国、企業、労組、そして個人のあり方をつねに考えていた岡崎さんだからこそ、ひるまず、自信をもつて闘い続けてくれたのだ。明るく、ダイナミックに動いてくれた岡崎さんのおかげで支援の輪も大きく広がり、最終的には会社の口頭での謝罪を勝ち取ることができた。九〇年に国会議員になった岡崎さんは、女性や人権の分野で大きな実績をあげてきた。その働きが認められて、逆風をはねのけた今回のトップ当選になった。今後の、さらに大きな活躍に期待する。

完敗しました。
だからこそたたかいは続けます。

比例区(兵庫) 岡崎宏美

十七日間という暑くて長い選挙期間が終わり、一息ついているところです。

今回の選挙は、三年前の、私ども新社会党の国会議員がいる中での参議院選挙と違い、国会議員がいなくなつた中での選挙ですから、厳しい結果ができることは予測はしていました。しかし、たった一人でも当選者を出したい。それを足がかりに、また新社会党の根を張りたい、というのが私たちの願ひでした。

私は参議院比例区の候補者の役割を与えられ、東海・四国・近畿ブロックを走り回りました。しかし、残念ながら比例区、選挙区とも、当選者はゼロでした。

それでも、その中で、党の枠をこえた多くの人たちに出会うことができました。自分の生き方に誇りをもち、頑張っている人たちです。これは私がこの選挙で得た大きな宝物です。

これから憲法改悪への道は急速に進み、競争社会はますます厳しくなっていくことでしょう。私たちはゆつくりと休んでいる時間はありません。

これからも「人が人として平和で安心して暮らし、働き続ける社会」を作るために、周りにいる仲間と共に歩み続けたいと思っています。

新社会比例で落選 岡崎 宏美さん

議席ゼロ「残念です」

「(非拘束名簿式の)選挙制度は小政党にとって不利。厳しい結果はある程度は予測していたが、議席を獲得できず、残念です」。比例代表の結果が確定した三十日朝、議席ゼロに終わった新社会の岡崎宏美さんは、神戸市中央区の事務所で敗戦の弁を語った。

国政選挙を戦い続ける足掛かりにと位置付けた戦いだったが、政党要件の条件となる得票率2%にも届かなかった。

一九九六年、非武装・中立の旧社会党の基本理

念を掲げて旗揚げ。しかんら三人が比例名簿に名し前回参院選で、国会議を連ねた。岡崎さんは昨員はゼロに。今回、衆院 年六月の衆院選からの議員の経験がある岡崎さん 戦だった。

「弱者切り捨ての競争に反対」と小泉改革を批判。東海、近畿、四国を回り、支持を訴えたが、届かなかった。岡崎さんは「党として議席獲得に向けた努力を今後も続けていく」と話した。



議席ゼロに終わった新社会党。「残念」と話す岡崎宏美さん＝神戸市中央区



つらかった。しかし楽しかった。
選挙に関わって、女性たちは自信を持ちました。

神戸市 松永宏美

私たちは（全国一般恵泉寮支部）岡崎さんの一回目の選挙の年に解雇され、ずっと裁判闘争を続けています。私たちの職場は養護施設で、二年か三年で仕事を辞めていくのが当たり前のようなところでした。そういう中、「女性が結婚しても、子どもができて、健康で定年まで働き続けられる職場に」と、組合を作って頑張ってきたのですが、それを認めない、許さない経営者がいました。解雇されて組合をオルグして回りましたが、その時言われた言葉は、「あんた結婚してるんか。だったら、だんなに食べさせてもらったらええやろ」でした。組合の男の人の感覚はそういうものだったのです。それでも私たちは、「おかしいことはおかしい」と言い続け

ました。そして十年たった頃「あんたらの解雇を認めたら、わしらの首も危ない」と言ってくれるように変わってきました。言い続ける大変さと大事さを教えてくれた裁判闘争です。岡崎さんは私たちが裁判に入ったときからずっと一緒に歩き続けてくれました。私は子どもが産まれたときから岡崎事務所でも働かせてもらっていましたが、ずっと言い続けることは大変だけど頑張ろうと、いつも背中を押してもらっていた気がします。

そして今回の雲をつかむような選挙。みんなが手さぐりの中での選挙でした。昨年末から「ああでもない、こうでもない」とみんなが集まり、できること、やれることから始めたのですが、よくよく考えるといろんな失敗もたくさんありました。確かに選挙の専門家（言い方はおかしいかもしれませんが）から見たら「何をやっているんや」と思われることがほとんどだったと思います。だけど一人ひとりが自分で考え、行動しました。人に任せて行動するのではなく、人に言われて動くのではなく、自分の考えで責任を持ってやりとげた選挙でした。今までの選挙というと、女性は、将棋の駒のように動かされていたようにおもいます。男性並みに朝早くから夜中まで働く人間しか選挙はできない、させない、でした。しかし今度の岡崎さんの選挙は、係わった女性一人ひとりが自信を持つことができた選挙でした。選挙の結果は、憲法改悪の道をまっすぐに進むことになりました。黙ってそれを見ていることはできません。私たちは選挙の結果がどういうものであれ、「言い続けて」いくしかないと確信しています。



「倒れてもやまず」闘い抜きます

広島選挙区 栗原君子

熱い長い闘いが終わりました。「文部省是正指導」と称したヒロシマ攻撃真つ只中での選挙戦であったにもかかわらず、県内外から御支援いただいたすべての皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

小泉政権になって靖国神社参拝、教科書問題、憲法九条を含む憲法改正(悪)、集团的自衛権行使を検討、有事法制化、PKF凍解、アメリカからは、ミサイル防衛構想への協力要請など、私たち女性からみれば、キナ臭いことが次々出てきました。やっつてもらっては困ることばかりです。私は「小泉政権のような危険な政権はみたことがない」「憲法九条は、人類への愛です。九条改憲を許しません」と訴えて回りましたが、勝利には結びつきませんでした。

本格的な動きになったのは、昨年の秋あたりからでした。大雪の中でのあいさつ回り、お茶とお菓子でのミニ懇談会、漬物をもらったり、お寿司を作って待っていて下さった方、広島県内も沿岸部から中国山地沿いまでとなれば、桜の花も山つつじも一か月間見ることができました。「花見に行く」とか「福山のバラ祭りに行く」と言われて、喜んで出かけると、それは、市民の皆さんが花見をしているところに街宣車で乗りつけて、政策宣伝をすることでした。広島フラワー・フェスティバルにも出かけて挨拶回りをしたことなど、普段でしたら恥ずかしさが先に立つのですが、候補者となれば、

人一倍ブーブーしくなっている自分に驚きます。「まず、私という人間を知ってもらうことから」と、街頭での政策宣伝、ミニ集会などを企画してもらいました。

本番中は、ことのほか暑く、十七日間という長い闘いに、少々バテぎみな時もありましたが「候補者の代理はきかないから」と健康を気づかって下さり、乗り切ることができました。特に、〈栗原君子と輝く女性たちの会〉の皆さんが「頑張る丸」（おろしにんにくと卵黄を炒ったもの）を作ってくださり、それを毎日飲み続けたことが元気の源でもありました。終わったら思いきり寝てやろう、家の片付けもしよう、あれもこれもやろうと楽しみにしておりましたのに、終わってみるとすぐに「被爆五十六周年の八・六関連行事」に追われる始末。「選挙は済んだのに、あんたはいつになったら終わるのか」という夫の弁もありますが、貧乏忙しは、直らないよう
です。

今度の選挙は勝利できませんでしたが、県内外の多くの皆さんにお世話になりました。御恩返しは、決して忘れまいと思っております。これから小泉構造改革によって、働く人、中小企業者、障害者、女性や子どもたちなど、社会的弱者が切り捨てられていくのは明白です。また何よりも憲法九条まで変えられようとすることに、強い危機感を持っています。平和と民主主義、人権や福祉のために、身を投げ打って闘うつもりです。暑い日・寒い日、心をつくしてご尽力くださいましたすべての方々に、心からの御礼を申し上げ、今後とも「倒れてもやまず」闘い抜くことをお誓いします。



「ヒロシマから女たちの一票一揆」実らず

〈栗原君子と輝く女性たちの会〉代表 室本けい子

暑い、暑い、選挙戦でした。

栗原君子さんは身を削るように、『小泉の言う痛みを伴う改革とは、激痛、激痛ですよ!』『きな臭い事ばかり言う。こんな危険な内閣見たことない。憲法が危ない! 戦争への道ですよ!』と小泉政権との対決姿勢を鮮明に、しっかりと闘いぬきました。

手ごたえは、はつきりありました。熱い思いで握手を求めてくる人びとに、何度も出会いました。キリスト者の方々、仏教者の方々の支持も得ました。

教職員の方、そして人権と働く者の権利に取り組む人びとが中心になって応援してくださった栗原君子。これだけ人道に生きる人びとの支持があつて、勝利できないはずはない!

栗原君子さんは、本当に誠心誠意の人であり、傍にいて、どんなに惹かれていきました。

しかし、敗れました。私たちが企てた「ヒロシマから女たちの一票一揆」は、とりあえずは不成功でした。こんな人格者を支え上げることができないなんて、惜しくて惜し



くて悔しい。

選挙直後、広島は八月六日を迎え、栗原さんも呼びかけ人の一人である「戦争の道を許さない！ 八・六ヒロシマ大行動」がありました。そこへアジアの人びとから連帯のメッセージが何通か届き、栗原選挙の延長線上に確かな

充実感を得ることができました。

獲得した八二、九八四票は、すべて小泉批判票であり、一揆に立ち上がった人びとの、祈りをこめた貴重な票でした。

私たちは新しい力を得ました。

これからが本番です。

一揆のむしろ旗はおろすわけにはいきません。「ふたたびアジアに銃を向けまい」というヒロシマの良心の結集で、もう一度、「栗原君子とヒロシマ一揆」を！

私たちは、今日からまた行動を始めました。

平和へのたたかいは永遠です。



冒険の道を選択

東京都選挙区 黒岩秩子

前号十六ページに「ハンナン」として紹介された私が、三十年間住んでいなかった東京都選挙区から無所属で出馬するという冒険に挑んだ。四大政党が四議席を確保する無風選挙と言われていたところに無党派の風を起こそうという取組みだった。出馬表明をした四月はまだ森首相の時だったので、その勝算はなきにしもあらずとも思われた。しかしもともと堂本暁子さんの残り四か月のピンチヒッターとして、新潟から出てきたのだ。とにかくやれるだけのことをやってみよう。

中村敦夫さんが選対本部長。私の第一秘書である長男の宇洋が事務局長、そして、事務局は、私の中学(目黒九中)の同級生で、中村敦夫さんの高校(新宿)の同級生であった小林寿美枝さん。事務所は、四谷にある国民会議のものを使わせていただくことになった。

四月半ばから、電話をかけまくって、同志を募った。全くのボランティア選挙だというのに、少しずつ事務所の人があふえていく。五月連休から、街頭演説が始まった。中村敦夫新聞の号外を配布するということで、政治活動を展開した。無所属の場合、事前の政治活動はむずかしいというハンデを負っているのだが、中村敦夫新聞で「黒岩ちづ子さんが出馬を表明した」という客観報道ができる道が確保されたことは幸いだった。

苦手な街頭演説

しかし、ピラを受けとって下さる方は少ないし、演説に足を止めて下さる方も、とても少なかった。敦夫さんが前座として人寄せパンダの役目を果して下さったのは有難かったのだが、私がしゃべり始めると、消えていく人がいた。私は集会で、何分かの時間をいただけなら、その中で心をひきつける話ができる自信はあった。これまで、年に五十回以上の講演をしてきて、その実績はあったのだ。ところが、この街頭演説というのは、全く苦手である。今まで人のそれをきいて感動したこともないし、政治家の演説というものに対する拒否感さえ持っていた私のことである。

中村さんは確かに力強いハリのある声で、人の足を止める演説をなさる。しかし、私の得意とする分野は、彼のそれと全く重なり合わない。福祉の話はそもそも演説になじまない。敦



夫さんは言う。「東京の人は怒っているんですよ。新潟ではそれでいいかもしれないけど、東京ではもっと攻撃的にしゃべらなくてはダメなんですよ」

攻撃こそ正に私の本来得意な分野だった。三十年前新潟に移り住み、保母として働く中で、私は、自分のその攻撃性を削り落とす努力をしてきた。知的障害者や、登校拒否児とつき合う中で、攻撃して良くなることはない、と思うようになってきていた。自分の演説をテープできいてみると、何て甘ったるい声をしているのだろうと我ながら愕然とした。しかし何といつても、それが今の私そのものだから仕方ない。

時には私の話に足を止めて下さる方や、バス待ちの方に向かって話していると、バスを乗りすごして、聞きつづけて下さる方もあった。知的障害者によって人生観を一八〇度転換させられたこと、登校拒否というのは命を救う一つの方法であることなどを話していると、敦夫さん流にいうなら政治家の話ではないのかもしれないが、胸の奥深くで受け止めて下さっていることがわかる。ピラ配りをして下さっているボランティアの方々で、「いい話をきかせていただいた」と言って下さる方もある。

国会活動が選挙運動に

国会は、森首相から小泉氏に変わる過程で一月半も空転した。そのため、再開した国会は法案が山積みになっていて、実に忙しい日々だった。「国会より選挙に専任すべし」の声をきき流して、私は国会活動を第一義的に考えていた。敦夫さんの秘書さんや、厚生労働委員会の調査室の方々の力を借りながら、市民の声をそのまま国会に届けるべく、いくつかの質問書を市民の方に作っていただいた。そのような現場をふまえた私の質問は大臣や官僚たちの心をゆさぶる力があつたらしく、いくつかの

成果を、答弁という形で引き出してきた。議事録をホームページで見たとという方々から「いい質問をしてもらって嬉しかった」と言われたりした。欠格条項見直し法案や、年金法案の中でとり上げた無年金障害者のこと、介護保険になって困っている若年障害者のことなど。国会活動がそのまま選挙運動になっていることも感じた。実際、厚生労働委員会で、私の質問をつぶさに見てきた国会議員の何人かの方から「ぜひ当選して下さい」と声をかけられたものである。

最後の選挙期間

十一日夜、事務所開きと称して、翌日からの選挙への気持ちを一つにまとめるパーティーを事務所で開催した。七月初めから泊まり込んでいる北海道からの矢野さん。沖縄からやってきて下さった勝連町議員の東浜さんの三線に合わせて踊りが始まった。敦夫さんの友人である前弁護士会長の前田知克氏や、わいふ編集長田中喜美子さん、新潟からきて下さった友人の坂西茂男さんなどからの激励を受けて、闘志をもちした。

十二日、出陣式には、私の子ども六人と、アメリカの大学にいつている末っ子の四男の代わりとして一年間ホームステイで新潟の家に住んでいるスウェーデンの高校生がきて、七人の子どもが揃った。敦夫さんのアイデアで、長男、三女、などと書かれたゼッケンをつけて並んだ。新宿駅東南口には、沢山の支援者の皆さんが集まってきて下さっていて、嬉しい限りだった。仕事を休んでやってきた夫の話も、中村さんの話と共に拍手を受けた。しかし、肝心の私の話は緊張の余り、こわばってしまっただった。思い出すのさえいやというものだった。もっと、私は私でしかないことを、肝に命じておくべきだった。

少しずつ関心を持つ人がふえる

「ラジオで政見放送きいて感動したばかりです。お目にかかれて嬉しい！」と言いにきて下さる方があつたり、広報や政見放送で、少しずつ広がっていることが感じられた。街頭演説にいくところいくところ、近くの支援者の方がピラ配りや、演説をきくために待っていて下さる。事務所からFAXが流れるようになったとのことだ。

「クソ暑い」と敦夫さんが表現された暑さの中で、全身汗ダクになってピラまきして下さっている方々を見ては、この方々の熱意に対しても当選しなくては、と気があせる。しかしピラを手にしてもらうだけでかなり大変。しかも受け取ってもらえたピラがゴミ箱へいかない保証もない。

こんなことがあつた。駅での朝立ちをしたあと、午後の街宜までホテルで休みをとることになつていた。ホテルでチェックインする時、リーフレットを渡しておいた。帰りにフロントで「これを読んで涙が止まらなかつた。二十枚下さい。友人に配ります」と言われたのは、六十歳くらいの男性だつた。リーフにそこまでの力があるものなのか。自信を深めて私は、リーフを配るということに一番力を注ぐことになつた。

しかしそのことはまた別の問題を生むということに、気付くことになつた。演台の上に立つ私の位置から見ると、あの人ならピラを受け取つてくれると思える人に届いていない。そこでピラ配りの人に私が合図を送る。それを見ている一般の人びとには、そのことがどう映るのか。そう考えると、一枚のピラを渡すことより、その光景を見せないことのほうが大切だということに気付いた。合図を送ることを一切やめることにする。

世論調査結果

朝日新聞東京版が候補者十一人へのアンケート結果を毎日一つのテーマごとに公表し始めた。「景気対策」「首都における渋滞対策」など。一日目のアンケートを見た時、私はソツとしたのが事実だった。秘書の宇洋も「すぐに新聞を閉じた」と言う。忙しい真つさに沢山の新聞社からのアンケートがたてつづけにくる。面倒くさい、どこもこれも同じような質問、何とか統一してくれないものだろうか、などと思いながら仕方なく答えた回答が、そのまま公表されてしまったのだ。もちろん「紙上で公開します」と書かれてあったのだから、それは、私が悪いだけなのだ。言い訳の仕様もない。中村敦夫さんが後に言われたのは、「あれで十万票減った」。選挙対策の専門家、斉藤まさしさんは「エッ？ 候補者自ら書いたんですか。すばらしい。そんな人はいませんよ。皆、他の人に書かせるんですから」となぐさめて下さったが、気休めにしかならない。

そして、とうとう二十四日の世論調査結果で、私は八位ということになっていた。見た瞬間、血の気がひけていくのを感じた。「堂本さんだつて、一週間前は三位だったのに、首位までいったのだ。これから風が吹くのだ」と言いきかせても、カラ元氣にしか思えない。その朝、私は恐る恐る事務所に入つていったが、そこにいる人たちは何事もなかったように、いつものようにキビキビと仕事をこなして下さっていた。頭が下がる思いだった。

応援団

堂本睦子さん、三木睦子さんが二十一日に応援に来て下さった。お二人とも有名人なので人垣がで

きた。堂本暁子さんは、私や、その日集まっていたゼッケンつきの我が子たちにインタビューをして下さり、そのおかげで、いつもとは違う話をきいていただくことができた。三木睦子さんは、「こんな方を落としたら皆さんが損なさいますよ」などと、八十四歳などとは思えない元気で話して下さった。

市議や区議、都議の皆さんや、安田せつ子さん、岩瀬房子さんの力強い応援も嬉しかった。大学生や若い女性の応援演説も、道行く人の足を止めるのに有効だった。

ボランティア選挙の人間関係

敦夫さんはよく言っていた。「ボランティア選挙というのは、その内ケンカになって、グッチュグチュになりますよ。それから候補者は、頭がおかしくなって入院したりしますよ。僕だってそうだったのだから」

ところがである。現実には、ほぼ何事も起こらず、私も入院することがないばかりか、選挙期間に入ってからますます元気になり、去年までは手足が冷えるため、夏でも長袖で通していたというのに、半袖が着られるようになり、あれだけ嫌っていた冷房を心地よく思うほどになったのである。

長男の宇洋が、たまたま勤めていた会社が、千葉県知事に堂本さんを強力に押していたという事情



があつて、二月半ばから、堂本さんの選挙を手伝うため休職扱いにしてくれ、その後、私の秘書として送り出してくれた。彼が堂本さんのボランティア選挙の中心にいて二十日間くらい堂本さんのカバン持ちとして傍についていた。つぶさに見てきたということが、とても役に立った。彼は、「僕たちは給料を貰っている。だから一定の水準以上の仕事ができなくてはならない。だけどボランティアの方々にたいしては、要求をすることもいけないし、まして失敗を責めるなんていうことは一切してはならない」と、口癖のように言っていた。だから「失敗はすべて折り込み済み」という言い方で処理していた。お互いに敬遠したがっているボランティアグループは、顔を合わせないで済むような配慮もしていたらしい。そして、ボランティア間のいざこざなどは、あることが当然なのだが、候補者の耳には入れないようにしてくれたらしく、私は、終わってから知ったこともいくつがあった。しかし、何はともあれ、ボランティアとしてきて下さっていた方一人一人が、目的は一つ、というところで、お互いを乗り越えていく努力をして下さったことが一番大きかったのだと思う。

私が一番嬉しく思ったのは、「ひきこもり」と言われるような状態にあつた方が、何人か事務所にこられたのを、実に温かく迎え入れて下さっていたことだ。一人の方は、話しかけられたくないという感じで机の隅の方でモクモクと発送作業をしていた。それも、なるべく人数が少ない土・日の夕方などを選んで下さっていたことを、早々とキャッチして、意に沿うように皆で配慮して下さっていたらしいのだ。何とこの方は、投票日の前日には、街頭でビラ配りまでして下さるようになってきたのである。そして最後の打ち上げパーティーにまで顔を出し、その雰囲気堪能している様子だった。

また、私がやっていた大地塾（登校拒否児、障害者）の塾生もきてくれた。三人の内のひとり

塾にきていた当時、沢山のこだわりがあった人で、「エレベーターに乗れない」がいまだに続いている。当時は車やバスに乗るのも抵抗があったというのに、一人で新潟から新幹線に乗ってやってきたというので私はびっくりした。その夜、泊まったホテルがエレベーターしかなかったため、無理をしてそのエレベーターを利用して八階まで上った。その結果、その夜は一睡もできず、翌朝、病人状態で帰っていった。それでも、一人で行けたということで、大きな自信につながったと本人は言っている。

残る二人は、街頭演説の時、マイクを持って話してくれ、通行人の足を止める役目を果してくれた。

終盤戦での子どもたちの活躍

出陣式の時、帰国できず、ガーナにボランティアとして行っていた末っ子が十九日に帰ってきて、直接、選挙事務所に来てきた。翌日から街頭に出て、演説を始めた。二十歳の若者がしゃべっているということもあって、ひとびとは視線を投げてくれる。

二十六日に教員をしている長女が夏休みに入ったため札幌からやってきた。その日から三男も会社を休んで手伝いに来たので、仕事帰りにきた次女を含めて五人の子どもが、初日に使ったゼッケンをつけて街頭に立った。これは、大変な人気を呼んだ。新橋や上野の人通りの多い交差点で、前後につけている「三男」「四男」が人目をひき、受けとったチラシにのっている七人の子どもの写真と見比べながら、立ち止まってくれる人が、人垣を作っている。展示物よろしく並んでいる子どもたちは、手を振りながら実に楽しそうな光景をくり広げてくれた。

強い日差しに鼻の頭に火ぶくれができて血まで出ている私も、そんなことは何も気にならず、何だ



かお祭りのように楽しくなっていました。最終日には、三女もきて、六人が勢揃い。私が言った。「高校時代、停学をくった人、手をあげて」。長女、次女、三男、四男が手をあげる。スピード違反や、万引き、飲酒などで、過半数の子どもが停学をくっている。子どもたちが悪いことをしたとき、大人は反省させられて、親としてひとまわり成長する。その時、親子の絆もしっかりと結ばれる。

応援にきて下さった堂本さんが、「秩子さんは、子育てに仕事に、御主人の御飯も作って」と言われたので、私は「夫のごはんは作りません。夫が朝食と高校生の弁当を作っていました。私は子どもにしつけをしなかったけど、夫にはキチンとしつけをしました」。すると夫が私からマイクを取って「しつけられたわけではない」と反論。きいている人たちも実になごやかになって笑いが広がった。

夜八時でマイクが使えなくなり、街宣車は

事務所に引き上げる。その日、うぐいす嬢の皆さん「今日で終わりなんてつまらない。もつとやりつづけたい」と言っていただけあって、八時以後、街宜車の窓から肉声で、うぐいすをやりながら事務所に帰った。三十分くらい疲れも見せず、三人それぞれが、肉声で「黒岩ちづこはー」と、外に向かつて語り続けたのである。

投票日。敗北会？ 祝勝会？

二十九日の朝から私は事務所にいつて電話かけを始めた。日比谷高校同窓会名簿で、今まで留守で通じなかった若い世代へだった。五十人かけて、黒岩ちづこを知っている人は一人か二人、というのが現状だった。これが私にとって正に世論調査だった。当選することはありえない、という現実をしっかりと受けとめた。

夜、出口調査で八位であることが判明した。九時に事務所で敗北宣言をし、身を粉にしてやって下さった皆さんにお礼を言ったあと、すぐに近くの二次会場に行った。そこで自己紹介かたがた一人一人が選挙の話をした。一人の方が「駅のホームでベンチに座っていたら、隣に知的障害者が座った。元の私だったらソートと離れていたところだが、私は、そこに座つたまま、その人に話しかけた。自分がこんな風に変われたことがとつても嬉しかった」と言われた。私は、これこそがこの選挙だったのだと思つた。

リーフレットに写真がのつている知的障害者の耕輔君（二十三歳）が、二回、事務所に来てくれた。一回目は、公示日前日の事務所開きに新潟からきて、さんしんに合わせての踊りの輪に入ったら、すっかり高揚してしまつた耕輔君、翌朝、父親が目ざめたら、もうすで行方不明。探索願ひを出して

探しまわること何と三十四時間。四ツ谷から出て見つかつたのは板橋だつた、というすさまじい行動力である。たまたま千円もつていたため、自販機で飲み食いできたのが幸いだつた。二回目にやつてきた最終日には、静かに座っていて、親の元から離れることはなかつた。彼も独学で「学習」したのだつた。

そんな人をも擁した選挙だつた。そのおかげで、ここにかかわつた人々の心を彼らは溶かしたのだ。新潟で私がやつてきた知的障害者、登校拒否児たちを中心に据えた地域活動を、東京に持ち込んだ選挙戦だつたと言える。

三十一日、事務所で打ち上げ会をした。何と、出席者は、事務所開きの時より大勢で、そこそこで盛り上がつていた。中村敦夫さんをして「皆さん、今日は祝勝会じゃないんですよ。間違えないで下さい。敗北会なんですよ」と言わしめたほどだつた。三十日に皆さんに流したFAXに、「ここでできた絆を大切にしていきたい。これからも議員でなくてもできる活動を続けていく」と書いたのが、皆さんの共感を呼んだということだつた。正に祝勝会ともいえる盛り上がりを見せた打ち上げ会で、八月二十五日に私の家のある新潟県南魚沼郡の浦佐ヤナで再会することを約束して、その日は別れた。

上京しての敗戦処理

二日には参議院議員会館も宿舍も追い出され、新潟に引越してきた。FAXや手紙でお礼状を出す傍ら、私は、敗戦処理のため、上京することを模索した。こちらに引越す前日、会館にかかつてきた電話で、老人二人暮らしの方から介護の相談を受ける。ひきこもりの男女二人をかかえるお母さんの相談も受ける。それから坂口厚生労働大臣にも会って、四か月間に私のした質問への約束を、更

に徹底してもらおうようにお願いをする。(WINWIN)という「女性を議員にしよう」という団体から推薦を受け、多額のカンパをいただいた。その団体の代表である赤松良子さんにも会いたい。八月十日から十二日、上京してフルに人に会ってきた。東京で活動していく拠点作りも考えてみよう。本当にこの、一六万七、五七七票という票を一票ずつ積み上げて下さった皆さんとの絆の上に、これからの活動をしていこうと思う。

私は、この楽しかった選挙活動を一緒に戦ってくださった、小学校から大学までのすべての同窓会の皆さん、職場の同僚や教え子たち、七人の子どもたちの友人、そして〈あごろ〉の皆さんに、心から深く感謝したい気持ちで一杯である。

いんちきオバアのいんちき応援記

斎藤千代

黒岩秩子さんが東京都の選挙区で立つという第一報は、たしか新潟の鈴木勢子さんから頂いたように思う。すでに五月。「えっ!」、思わずうなった。

今度こそ市民と護憲政党が一体となって、「一人」を送り出そう、と右往左往し続けてきた東京の市民運動の人びとは、正直言って、この時点で、もう投げかけていた。定員は四名。自・公・民・共の壁は厚い。社民党は、田さんが今度はお立ちにならない。市民と護憲政党が力を合わせなくては、護憲勢力は半数に達しない。

奥平せい子さんたちは、去年の秋から集会を何度も聞き、「九条を護る政党」と無党派の市民を結

びつけようと、身も細るほど努力を重ねておられた。非常事態であることは明白だったので、「この方なら」と、みんなが納得できる候補を擁立しようと、私も及ばずながら走り回った。そして、ついに望外の大物から、良い感触を頂いたときは狂喜した。「久しぶりで今度は燃える選挙ができるね」と、仲間たちの喜びの声。真実、うれしかった。

しかし「無所属で立つことを視野に入れる」というその方に、社民党も新社会党も冷淡だった。あくまでもそれぞれの党の候補を立てるといふ。奥平さんは、「もう手を引く」と怒った。私も手を引くほかないと思った。

森支持が一〇%台の頃だったから、社民党も新社会党も、状況を楽観していたのだろう。

しかし、千載一遇の好機と思われた参院選は、森退陣、小泉登場で一変した。情況は一転し、絶望感だけが深くなった。その時点での黒岩さんの登場……。

申しわけないが知名度がない。中村敦夫がバックにいるとは言っても、中村票がそのまま黒岩票になるとは思えない。せつかくなら、希望のある、楽しい選挙戦をしたい。ここ何年も、選挙の度に累々たる屍。もう、あれはイヤだ。

そのうち、大学の後輩から電話がかかるようになった。黒岩さんと母校を同じくするその大学では〈さつき会〉という女子学生の会があり、それなりの活動をしている。しかし、政治的には自民系の人も多く、その縁だけで票がとれるわけでもない。私は素直に自分の気持ち話し、「お立ちにならないほうが良いと思う」と助っ人をお断りした。黒岩さんから直々のお電話にも、そのようにお答えした。

黒岩さんとは、〈あごら上越〉の合宿で一緒に過ごしたことがある。独特の鋭い感性を持ったおもしろい

方だ。しかし何となく「国会議員」とは結びつかない。堂本さんの跡を引き継がれたことは承知していたが、黒岩さんは国会議員の対極にある方、むしろ議員になどならないほうがご自身のため、と、私は、勝手に思いこんでいた。

そのとき、突如として小泉ブームが出現。ヒトラーが世に出た時は、こうだったろうかと思うほどのすさまじさ。とくに最も冷静であるべきマスメディアが、なりふりかまわずブームをつくりあげる姿に、私の頭には「戦争」の影がちらついた。

この前の戦争はどうして起こったのだろう。それが知りたくて、日中戦争直前・直後の新聞を、つぶさに読んだことがある。スリーS（スポーツ・スクリーン・セックス）氾濫の紙面が、盧溝橋事件で、突如「撃ちてしやまぬ」に一転、そのままズルズルと「折り返し不可能点」を越えていったドラマ以上のドラマに、眠れぬ思いをした記憶は、今も鮮やかだ。行動の主体は軍だったが、ムードをつくったのはマスメディアだった。情況は現在と酷似している。自民党政府が一国の政治の責任を負いながら「戦争」や「バブル」を何一つ反省していないのと同様、最優秀のスタッフを集めているマスメディアも、自らの戦争責任を反省していないように見える今は、「戦争への道」にさしかかっているとも言える。泡沫であれなんであれ、小さなともしびを大切にしよう、と思ひ直した。

考えてみると、私は、〇・〇％でも可能性があればチャレンジする人間だ。小選挙区制反対の時も、「くつがえすのはラクタが針の穴を通るよりも難しい」と聞いて、「では今日から始めましょう」と立ち上がった。今度の選挙でみんなが、「あの方が承諾する可能性など〇・一％もない」と言い切った超大物に、東京選挙区からの出馬をお願いにうかがった時も、同じ心境だった。戦争阻止を可能にするのは、どんな状況の下でも、自分の力のすべてを出し尽くすことしかない。「八月十五日には

絶対に靖国に行く」という小泉氏の心の奥の芯に、少なくともジャーナリストの端くれである身は、無神経であつてはならない。今、私ができることと言えば、黒岩さんと共にたたかうことだ。

寸暇もない毎日だったが、遅まきながら、及ぶ限り、電話をかけ、ハガキを書いた。戦争阻止という意味では、六〇年安保で樺さんと共に闘った彼女をしのぐ候補者は見当たらなかつた。

しかし、彼女の選挙用ハガキはロマンチックすぎた。「七人の子を産み育てた母」をキャッチフレーズにするとは……。私は一枚一枚のハガキに、一言メモを添えることにした。そして、応援の『あら268号』を超特急でつくった。

明日は選挙という土曜日、ようやく時間をつくれた。

朝一番に四谷の選挙事務所駆けつけると、黒岩さんは電話中。一票、また一票を、と最後の追い込みの声は、すでに枯れている。「出かけますよ」の声に、あわてて外に出ると、六人乗りの小さなワゴンがビルの前に一台。これに黒岩さんもお乗りになるのかな、と男性二人、女性二人の相客を見回すうち、ワゴンは動きだした。

「新宿駅西口。西口がダメなら行く先は歌舞伎町」と、車外の人が指示する。リーダー格の男性がそれを受けて、携帯で、「歌舞伎座に行きます」と、伝え始めた。三人の女性は「歌舞伎座ではありません。歌舞伎町！」と金切り声を出したが、リーダーはまるで耳に入らない様子。「歌舞伎座！」
「歌舞伎座！」と叫びつつける。なるほど、見事な素人選挙だ。

西口は果たしてダメだった。大政党のりっぱな選挙カーが何台も連なつて、十五センチの隙間もない。七八年に、吉武・俵選挙で女たちが決起したとき、吉武さんが「船艦大和にゴムボートで体当たり」と嘆いていたのを、突然思い出した。我がミニワゴンは、体当たりすれば命がない、とばかり、

遠望しただけでたちまち旋回、歌舞伎町の裏通りに入る。そこへ、黒岩さんに乗せた車が来た。私たちのワゴンよりは、長さも幅も三十センチずつくらい大きいとはいえ、ミニワゴンであることに変わりはないが、拡声器はついていた。

停車すると、さっそく呼びこみが始まった。

「黒岩ちづ子でございまーす！ 最後のお願いにうかがいました」

このウグイス嬢、すこくうまい。中村敦夫さん関係の劇団の方か、アナウンサーか。「うまい。フーン、うまい」「うますぎる」「それにしても、（最後のお願い）という常套句はソツとするなア」

聞いているうちに、私はなぜかだんだんイライラしてきた。うますぎる。だからひっつかからない。通りを歩いているのは女も男もほとんど若者だが、一顧だにせず歩き続ける。もちろんリーフなど二歩もなく断わる。とうとうガマンができなくなつて、「マイクを貸してください。応援に来た者です」と、この恥ずかしがりの私が強心臓でマイクを手にした。「黒岩さんはフツの市民です。私たちと同じフツの市民。今度の選挙はりっぱな方ばかりが立っています。フツの人の声は届かない。だから、私たちフツの市民がボランティアで応援しています」

マイクを手にするのはいふん久しぶりだし、言葉を考えていなかったたので、シドロモドロもいところだ。でも、上手すぎるよりはいい。と、私は勝手に思おうとした。しかし、私がウグイス嬢の上手さにイライラしたように、ウグイス嬢は私の下手さにイライラしたようだった。

「お返し下さい」

マイクはその後、二度と私の手に渡ることはなかった。

*

マイクがついていると言つても、黒岩さんの車も超ミニワゴンである。いわゆる選挙カーではない。車上に立つて、四方八方に顔を広め、声を届けることはできない。黒岩さんが立つのはビール・ケースの上。女性としては背の高い黒岩さんだが、雑踏の中で、その姿は小さく見える。

長男・長女・次女……と、「七人の子」の背看板・胸看板でのアピールも、大都会の無関心族の中では完全に黙視される。リーフ配りの人手も足りないし、誰が差し出しても、受け取ってもらえない。私はピラ配りはベテランなので、多少はお役に立つかと思つたが、さし出し方が悪くて受け取らないのではない。「ピラ嫌い」の人びとばかりなのだ。私自身は、ピラの中身が何であれ、人がピラをさし出すと、拒否できない気弱派（人情派？）だが、歌舞伎町という場所柄も良くなかつた。女も男も目的を持つて遊びに来ている。大方は連れがいる。相棒以外には全く心の向かない人びと。断わり方も断固としている。

黒岩さんのPRをのせた『あごら268号』も持つてきた。これは長年の勘でピカッと来る人だけに渡し、受けとつてもらえた。狙いは大方正解だったが、その「ピカッ」は、なんと少ないこと。

「新宿を切り上げて、次の目的地の調布に行つたらどうでしょうね」と、配り族の一人に声をかけると、「それがダメなんですよ。インテリの集まるどころ、サラリーマンの住宅街、どこもダメ」。連日、ダメ、ダメを続けているという。小泉グッズが一千万個も売れている。だから、その余は、すべてではないのだ。

黒岩さんのスピーチは、さすがに良かった。リーフには入っていきなくて気になつた「平和」のこと「戦争」のことも、やさしい言い方できつちり訴えた。だが、残念ながら、「何とかに小判だ」。たまに一人か二人、駆けよつて握手する人がいると、後光が射すようで、私は、その後ろ姿に手を合わせた。

車を降りた黒岩さんは、歩き始めた。ポランティア族も、中村敦夫さんも、それに従った。いつのまにか東口、そして新宿通り、三越前から伊勢丹、なんと我が（あごら）のテリトリイに来ていた。歌舞伎町よりは、リーフの反応は良く、とくにお店の人びとは、商売柄か、受け取らない人は、まずいない。

黒岩さんは、歩きながら語りかけつづける。それを聞いて、質問を私に投げかける人が出た。得たり！ 話に熱が入っている間に、声は遠ざかっていた。あわてて探したが、姿は見えない。私は片耳「ろう」なので、音の方向感覚はゼロ。とうとう一行からはぐれてしまった。「天の声かもしれない」と、思い直した。私の参加は、「ご一行様」にウエルカムではなかった。ここは撤退しよう。

本来、この日は病院に行く日だった。それをやめて「黒石デー」と考えたのだったが、時計を見ると、まだ間に合う。

病院の待合室でリーフを配った。ここでは拒絶する人はいなかった。待つ時間は長い。何か文字が手に入ると、繰返し読む。（この次の選挙は病院回りをしよう）と、アイディアにホクホクした。



*

開票は次の日の夜、意外だったのは、「女性では断然一位」と思っていたのに、畑恵さんが、黒岩さんの上を行っていた。

選挙事務所をお訪ねしようとして電話をすると、「今、みんなで食事に出たところですよ」。

ま、それなら明日にしよう。当選なら、テレビの画面は枯枝一本でもにぎやかなほうがいいが、この分ではちよつとムリだろう。(後で知ったことだが、この時、黒岩さんたちの夕食会は笑い声があふれ、店の人から「何のお祝いですか」と聞かれ、事務所に取材に来たテレビ局は、「えっ、もう敗北宣言……」と、驚いたそうだ。)

打ち上げは、その翌々日。なんとなく、人からの良さそうな人が(もちろん私もその一人?)次から次へ、押しかけて、結構広い部屋が超満員に。そのそれぞれが、すぐ、前後左右の人と仲よくなり、話し声、笑い声で、中村敦夫の大きい声も、ほとんど聞こえない。……ということで、スピーチめいたものはなかったが、いつのまにか、みんないい気分になり、「この次はまたみんな選挙しようネ」が、暗黙の諒解になった。「八月二十五日に、新潟の黒沼邸にご招待。ステキな温泉と、とびきりおいしい鮎……」と、うれしいお知らせも。みんな、たちまちその気になった。この仲間とまた会いたい。さらに仲よくなりたい!

いろいろな選挙につきあつたけれど、こんな楽しい選挙は初めてだ。ここは「悲壯感」などひとかけらもなかったの、もちろん「絶望」もない。二週間、みんなでウロウロしながら、「希望」のカケラをもらい、それぞれが少し豊かになった。こんな「ええ加減」運動で、得票はなんと十六万七千票。供託金は没収されなかったゾ。カンパのおかげで赤字も出なかったゾ。バンザーイ!

平和、女性、人権、環境のための たたかいは、やめません

〈比例区・社民党〉 清水澄子

まず初めに私は〈あごろ〉のみなさんをはじめ様ざまな立場から応援をしてくださったすべての皆様に感謝を申し上げます。

大変暑い夏でしたが、私は元気に戦い抜きました。しかし、異常とも言える小泉旋風と、従来とは異なる非拘束名簿式制度の下で、大変な苦戦を強いられました。結果は三万二千七百二十三人の支持者でした。一生懸命取り組んだ人たちからは「信じられない」とか、「なっとくできない」という声が続いていますが、現実をそのまま受け止めた上で、私はこのような困難な条件の下で支持してくださった三万二千余の方々に対して、絶対にその期待を無にしてはならないと自分に誓っております。

ところで、今回の非拘束名簿式制度の選挙制度ですが、自民党が昨年六月の総選挙で個人候補者の得票数より比例区で自民党と書いた人が八百万人も少なかったことから参議院選挙に危機感を持ち、昨年十月臨時国会を開き、野党抜きで法改正を強行したしるもので、選挙制度という有権者の基本的な「選挙権」にかかわる問題が、与党を利するためにいとも簡単に変更できること自体が、日本の民主主義にとつて重要な出来事でした。しかも、この制度は、タレント性とか知名度の高い人、あるいは組織や資金のバックを持つ人に有利です。私のように二期十二年にわたり参議院に議席が有った者

でも、これまで比例区選挙では党名でよかったので、個人名での投票は一度もなく、新人同様であったにもかかわらず、全国の広い選挙区を相手に個人が選挙運動をするという、全く無謀とも言えるものでした。



しかし、私の立候補を決定した（日本婦人会議）や（新しい政治を清水澄子とともにつくる会）のみなさんは、私が女性解放運動や労働運動、市民運動の中で培ってきた政治理念と、二期十二年の国会における政治家としての実績を評価して下さったの取り組みでした。

おかげで私は、小泉政権の構造改革が「市場の力」への限り無い信仰と、徹底した能力主義社会を目指したもので、今後ますます貧富の格差と社会不安が生ずることを警告し、グローバル経済の時だからこそ人間中心の環境保全と男女平等を基本とした福祉社会への構造改革を、と訴えつづけました。併せて、小泉総理の靖国神社公式参拝や集団的自衛権の行使問題などに示される憲法無視と歴史認識の希薄性、しかも近隣諸国との友好関係を全く度外視した言動を批判し、私は憲法を絶対に護りぬくこと、その具体化のために社民

党への支持を訴え「女性の手で政治参加を」と呼びかけてきました。

社民党は、現役であった候補者は、資金も活動も個人でやることを決定し、新人優先の方針で臨みました。九州ブロックは太田候補、東北・北信越は又市候補、近畿・東海は船橋候補という、それぞれの重点エリアが決められ、私は一応北関東(埼玉、群馬、栃木、茨城)、南関東(千葉、神奈川)でした。しかし私の場合、一部を除いて社民党の本格的なとりくみを得られませんでした。したがって、私の選挙運動は一部の社民党県連合を除き、〈婦人会議〉や〈勝手連〉の人たち、つまり草の根の人たちに支えられたものでした。私のように社民党に属する候補者は、国政選挙を闘うというとき、その政党の支援なしでは闘えません。また「市民」が政党に代わって選挙を闘うということは、土台無理な話だといわねばなりません。そうした意味でも社民党の方針に疑問が残ります。

それにしても、私とともに闘って下さった方々には頭が下がりました。「一生懸命」ということがこんなに重いものか、心と体を通して伝わってきました。上べだけの人か、真剣な、の人間性がパシッと反応してくるのには驚きました。自らを省みたことでした。

ところで、選挙運動を通して学んだことの二点。それは、選挙運動の分野では、まだまだ女性の力量が不足しているということです。私の場合は男性の協力を得つつも、女性が中心となって一切を企画し推進してきました。今回のような選挙制度のもとでは初めての体験でしたが、候補者と運動員が、それぞれの独自性と、自発性を発揮しながら、目的を一つにした緊張感と一体感にあふれる充実した力を味わったことは、またとない悦びでした。そこには高度な政治性と決断力が求められ、さらには厳しい規律と柔軟な優しさのハーモニーも求められるなど、質の高いエンパワーメントを体験できたことでした。

二つめには、多くの女性が政治とのかかわりを求めており、潜在的なエネルギーの持ち主だということを見出したことです。

私は選挙期間中に初めてお会いした人たちと、何か所かミニ懇談会を開いてきました。そこで私は、議員になってとりくんできた「従軍慰安婦」の問題や戦後補償問題をはじめ、「子ども買春・子どもポルノ処罰法」や「DV法」等を成立させ、保育料の上限にストップをかけたこと、「女性の年金検討委員会の設置」など、女性の生活や人権、平等、平和を基軸に、医療、年金、介護、福祉の政策にどのようにとりくんできたか。あるいは沖縄の基地問題や脱原発政策と環境問題、また日朝国交回復の促進やアジア諸国との友好と平和政策について語りあうと、必ずといってよいくらい、大半の方が、「私にできることをやらせてほしい」と運動に参加してこられるのに感心しました。

このことは、日常に政治を語る場がなくなり、女性たちの意識とエネルギーを政治改革に結びつけていく運動体と、その活動が不足しているのであって、運動の原点を再確認することができました。



私はこうした新しい「力」を信じ、これからもみなさんと一緒に選挙制度を変えさせる運動や憲法改悪に反対し、右傾化する政治への抵抗と、「パートタイム均等待遇法」やDV法の実効性のための「女性福祉法」の実現など、これまで手がけてきた課題の責任を果たすために活動を続けていきます。しかし、私が一番気にしていることは、このままでは社民党が衰退し、新保主義とナショナリズムの政治勢力に対抗する社会民主主義の構築が危ういことです。これから始まるであろうアメリカ型小泉流の構造改革は、働く人びと、とりわけ女性と社会的に弱い立場の人たちを容赦なく直撃するであろうことを考えるとき、じつとしておれない焦りを覚えますが、私は、時間ができたことを幸いに、これまでの運動の再検討と、世界で始まっている「反グローバリゼーション」の新しい社会運動に注目し、日本における「社会民主主義」を追究したいと考えています。

改悪された選挙法に、翻弄された参院選

〈日本婦人会議〉

津和慶子

参議院選挙公示の七月十二日、群馬県・高崎駅頭で、清水すみこ候補は第一声。四十度を超える炎天下、「小泉改革」批判でスタートを切った。十七日間を走りぬけ、七月二十八日川崎駅頭で土井社民党党首と最後の訴えをして、選挙事務所に戻った清水さんを運動員が総出で出迎えた。疲れもぐちも一言も口にせずたたかいぬいた清水さんへの敬意とねぎらいの拍手を贈った。

清水さんは、最初から、七十歳を超える年齢、二期を努めたのだから引退を、後継者をつくるべきだ、などの批判をされた。なぜ、年齢や何期やったら交替ということが、あたり前のように言われる

のか。業績、実力よりなぜ、「形」が問題にされるのか。私たち婦人会議は、女性運動・市民運動と国会をつないで新たな法律や政策をつくってきた実績、日朝・日中友好、戦後補償問題など、手がける人が少ない課題をとりこんでいくために不可欠な存在であることを確認、清水さんの三期目への挑戦に向け、組織として擁立を決めたのが、昨年十月だった。

その直前に選挙制度が与党の強行採決で可決され、翌年七月の参院選には適用しないという約束が反故にされたうえ、運用の具体的な方法が決まらないまま選挙戦に突入したのだった。

知名度も金も大きな組織もない候補者にとつては、残酷区、銭酷区。そういわれてきたかつての全国区選挙に後戻り。選挙制度が改まったことも周知されていなかったため、二〇〇万票余の無効票が出たほどだ。どんなに実績を積み、女性運動や市民運動の中で知られていても、全国の人に個人名を書いてもらうには、TVなどマスコミに乗った人の知名度には及ばない。

政党のただで名簿順位が決まる制度がよいとは限らない。順位決定のプロセスや基準が明らかにされ、党内の予備選を行うなど、透明性、公正性を確保することが大事だと思う。しかし、その政党が決める順位には、その政党の基本的スタンス——どんな人を重視し、評価するかが示される。女性や障害をもつ人、その分野の専門家などの配置の仕方によって、その政党としての姿勢が問われ、結果として世論の目をくぐる。今回の「改正」はこうした、比例代表制度そのものの否定につながったといえる。今度の選挙制度では女性だけでなく、マイノリティの代表はほとんど当選は不可能だ。結果において、やはりマスコミでの著名人や利益集団の大組織の代表ばかりが当選している。

政治に何の実績もない著名人を並べた自由連合、その一方で党名だけ書くことを徹底し、最後に格差をつけて党内順位で当選者を決めた共産党、すべて個人名投票としながら、必ず当選させる人間を

あらかじめ決め、その他の人をサポーターと位置づけ選挙活動そのものを凍結した公明党、あいかわらず、業界のサポートを前提に大きいことはいいいことだとの「組織選挙」を展開した自民党は言うにおよばず、個人名を書く選挙といいながら、その実、内部で格差をつけ、差別して当選者を決めたというのが各党の実態である。社民党もその例外ではなかった。知名度による底上げを優先し、党や国会にどのような人が必要か、の論議は後回しになったといえる。ここでは「強い者」勝ちとなる。女性やマイノリティの代表を押し出すとするアフアーマティブアクションの理念は消えた。「弱者」の代表を積極的に位置づけることこそ社会民主主義の根本原則であるはずなのに、公正の政治実現のタテ前は実際の選挙方針にはつらぬかれなかった。それは今後の社民党の路線のゆらぎが懸念される。

それにしても「女性の政治参画」の実態、底の浅さも痛感させられた。「二人でも多くの女性を」が長年の女性運動の「合意点」であったとすれば、日本の進路



をめぐる厳しい選択が迫られている時に、あまりにも無力であることが示された。

シビアな政策論争、政治姿勢への問いかけを回避してきた結果、憲法、歴史教科書、靖国、男女平等の中身……、グローバル化、「構造改革」をはじめ、あらゆる問題に答えが求められる。こうした課題に「ジェンダーの視点」をもって対応できる力をもった女性こそが今の国会に不可欠である。そのためには選挙制度をこのままにはいけない。選挙制度そのものもジェンダーの視点で変えていく力をつくるのが、女性の政治参画の課題であると思う。

クオータ制やパリテなど、結果の平等を実施してきた北欧やフランスなどの政治参画の実践を日本の女性運動の課題としていかなければならないと思う。

婦人会議自身も数多くの選挙にとりくんできたが、自分の組織の代表を個人名を書いて当選させる選挙を自分たちの力でやりぬいたのは初めての経験であった。政党や労働組合との関係も自分でつくっていかねばならない。お手伝いや指示待ちでは選挙にならなかつたが、婦人会議だけでなく、兵庫・京都・北海道などで「勝手連」がつくられ、本当に「自分たちの選挙」を展開してくれた。

さらに、吉武輝子・三木睦子・北沢洋子・佐々木静子さんをはじめ、多くの方々のご支持を頂いた。それらは単なる支持でなく、運動の中でつながった「同志」であった。運動と国会をつなぐことの大切さを一番よく知っている人たちだ。こうした多くの女性たちの支援や意欲を、組織の中の力とつないで、本当のロビー活動の力をつけていくことが課題である。婦人会議のあり方そのものも問われている。こうした多くの問題を残した選挙戦であった。

しかし、歴史の岐路にたつ今日、自分たちの推す候補をもち、私たちの主張を人びとに訴えることができたことは婦人会議の誇りである。この経験を今後の運動につないでいきたい。

かく戦えり。されど……

〈比例区・民主党〉 竹村泰子

（あごろ）が応援してくださった七人の内、当選がたった一人という淋しさ。これが今回の参議院選挙をまさに象徴しています。野党側がござって反対したにもかかわらず、数で押し切り、新ガイドライン法、国旗国歌法、盗聴法等々に続いて一方的に成立させた選挙法の改正。わけの分からぬ小泉ブームと、この改正法に、完全にあおりを受けたというところです。

著名人が組織人でなければ議席を得ることができないこの法制は、女性や市民が議席を獲得することができない民主主義に反する法制です。比例制度というのは、そもそも専門家や、組織をもたない個人が、党派を超えて出ることができないものであるはずす。

今回、民主党の場合、比例候補は九人が連合傘下の労働組合出身の人びとでした。そのため私の選挙を応援できる組織はJ・R連合など少数しかなく、資金も公的な選挙運動のための費用のほかは私の僅かな貯金からでした。五当四落（五億かければ当選できるが、四億なら無理）といわれる全国比例。

無謀といえそうだったのかもしれない。しかし、草の根市民運動から出発した私にとっては、原点に戻るということなのかと挑戦。一人でも多くの人に会おうと三月十九日から民主党北海道の車で国会の合間に北海道を三か月走り続けました。北海道は広い！ その距離一万一千キロ、本番を合計す



ると二万キロ近く。沢山の人びとと会うことができました。不況の波にもあそばされる静まりかえった商店街。働いても働いても借金が増えるばかり、お天気に左右されて何の所得保障もない農家の人びと。すばらしい北海道の自然の中で、地方は苦しんでいます。小泉さんのいう地方交付税一兆円削減が、なんの手当てもなくいきなり実行されるとすれば死活問題。この苦しみを分かかってほしいと思いました。

小泉内閣の「靖国」や「教科書」問題で、すでにアジア外交の視点を失っている日本。その歴史認識のひどいことは許し難いものであり、私は北東アジアの平和のため、北東アジア非核地帯の実現を訴えました。それからこどもたちの世代のために農林水産漁業を守り、食物の安全を確保。原発にのみ頼らず、自然エネルギーを促進する、自然エネルギー促進法の成立をやりとげる。女性も男性もこどもも、アイヌの人びとも、在日外国人も、障害も持った仲間たちも、すべての人が自分らしく生きられる人権確立の社会を。

憲法前文と九条の精神を世界に向かって発信する。——これらの政策を訴えながら走り続けました。しかし、私は多くの人々にご心配をかけながら、当選を果たすことができませんでした。どれだけの人を失望させたかと思うと胸が痛みます。信教の自由や憲法の危機のときに議席を失ったのは、本

当に残念です。

一時の浮わつた感情や、みかけで、小泉自民党を支持した人びとが目覚めて欲しいと切に願います。女性にも大いに責任があります。有権者の半分は女性であり、今回の選択も半分は女性がしているからです。

でも、考えてみると、国政の外にいてもできることは沢山あります。親から虐待を受けて殺される子どもがあとを断ちません。世界の核軍縮は米の米本土迎撃ミサイル推進法の成立であやうくなっています。しょんぼりしているひまはありません。新たな運動に向けて働き始めています。どうぞよろしく！

女性の政治参加の道を切り開いてこられた竹村泰子さんへ

〈市民ネットワーク北海道〉代表 中島和子

参院選は、小泉首相が率いる自民党が大勝しました。しかし、自民党に政治改革や構造改革をまかせることは到底できません。参加型政治を実践する市民の力で、生活者のための構造改革を実現したいものです。

〈市民ネットワーク北海道〉は、九一年の統一自治体選挙が初めて四議席を獲得し、現在、札幌、石狩、北広島市議会と当別町議会に六人の議員を送り出し、北海道から中央集権型の日本の政治を変えるために活動しています。参議院選挙については、政策協定で合意できれば、人権、環境、平和問題等に取り組んで来られた竹村泰子(民主党・比例区)さんの当選を目指して支援活動を行うことを、今年六月に開かれたネット総会で提案しました。竹村さんは、九一年の選挙で、市民派参議院議員と

して〈市民ネット〉を応援してくださいました。

六月二十二日には、政策協定についての話し合いが行われ、二十七日には、民主党北海道幹事長・佐々木隆博さん立ち会いのもと、日本国憲法の遵守、ダムをはじめとするムダな公共事業の中止、男女平等参画社会の政策・制度の強化、女性の自立を目指した年金制度の確立、NPO・NGO等の「市民セクター」形成のための政策・制度づくり、再生可能エネルギーの導入をすすめる自然エネルギー促進法の制定等の八項目からなる政策協定書を交わしました。

七月十二日三時、竹村さんの第一声が大通り公園に響き渡りました。私も、応援の挨拶をさせていただきました。ネット会員も、竹村さんへのメッセージを書いた白い布を手に、応援にかけつけました。そして、連日、電話がけ、街頭でのパフォーマンス、そしてマイクを手には選挙カーからも支持を訴えました。しかし、市民派女性候補に対する壁は厚く、残念ながら当選には至りませんでした。女性のエンパワーメントがさらに求められていることを痛感しました。

竹村さんも本当に無念そうでしたが、十五年もの長い間、私たち女性の代弁者として国政でがんばってくださったこと、女性の政治参加の道を切り開いてくださったことに、深く感謝したいと思います。本当に、ありがとうございます。



資料 目で見る女性の状況 1

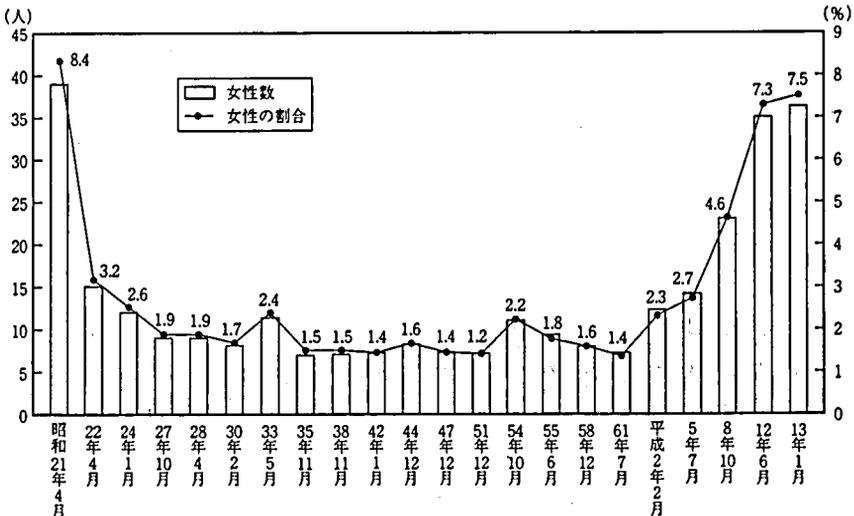
1. 政策・方針決定過程への女性の参画(1)

政策・方針決定過程への女性の参画は、「男女共同参画基本計画」の最初に掲げられている重要な項目だが、諸外国に比べて、残念ながら日本は非常に遅れている。国際比較でしばしば問題になる国会議員中に占める女性の議員の数も、戦後第一回の選挙(第二回衆議院選挙)は、二名連記制だったため、女性が衆議院に三九名も当選して新風を吹き込んだが、第二回は十五名、第三回は十二名に衰退し、以後、約五〇年間は、ほとんど一%台(七、八名)の低迷を続けた。衆議院に比例区が設けられてから上昇気流に乗り、現在は三八人だが、女性議員三〇〜四〇%という世界の趨勢に比べると、格差が大きい。

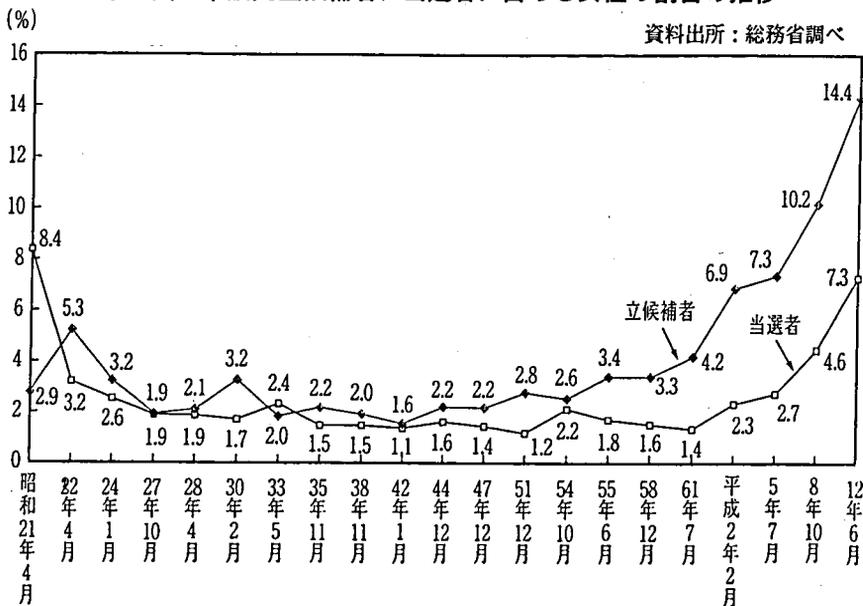
左ページの図は、衆参両院の、立候補者、当選者に占める推移を示したものの、両院とも、立候補者数は増加の傾向を示している。ただし、当選者数は、衆議院が確実に増えているのに対し、参議院はこの十五年間、上昇と下落を繰り返している。今回は上昇する順番(?)だったが、自民党の強い働きかけで突然浮上した新制度「非拘束名簿式」のため、女性が特に比例区で大苦戦、立候補者数は前回より約二五%も増え、過去最高の二八%に達したのに、当選者は、わずか十八名(十四・九%)と、過去四番目に下降した。

第1図 衆議院女性議員数及び女性の割合の推移

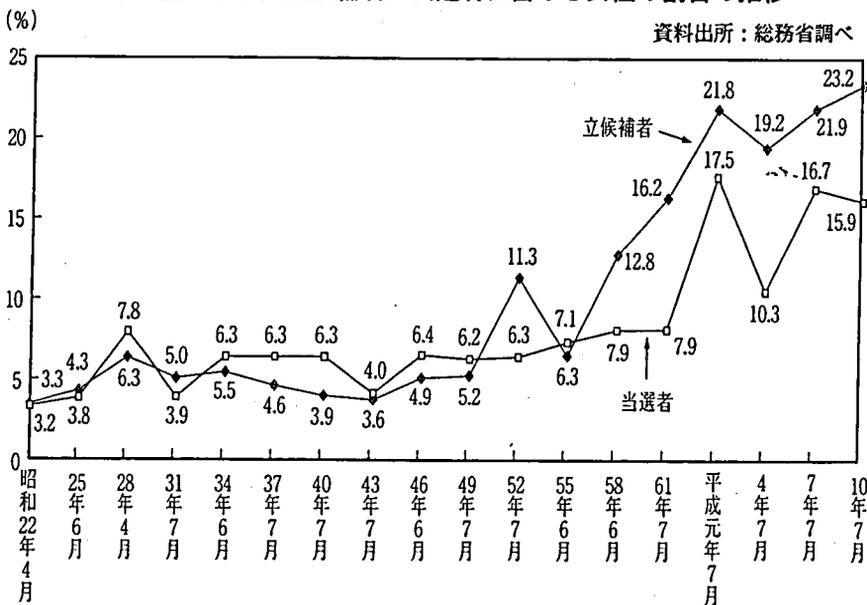
資料出所：総務省、衆議院調べ



第2図 衆議院立候補者、当選者に占める女性の割合の推移



第3図 参議院立候補者、当選者に占める女性の割合の推移





中国で戦死した父の遺影を抱き、靖国への合祀の中止を訴える金泰仙さん

「8・15 平和の集い」

二十一世紀最初の敗戦記念日、八月十五日。アジア・太平洋戦争のA級戦犯が合祀されている靖国神社に、小泉内閣の閣僚五人が公式参拝をした。中谷元防衛庁長官、式部勤農林水産相、村井仁国家公安委員長、片山虎之助総務相、平沼赳夫経済産業相（村井・片山・平沼は（みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会）のメンバーで、他の八十八人の議員と参拝）。十四日までに塩川正十郎財務相、竹中平蔵経済財政担当相、尾身幸次沖縄北方担当相、柳沢伯夫金融担当相が靖国を訪れ、現職の九閣僚が参拝したことになる。小泉純一郎首相は、十三日に参拝を行なった。この「二日前倒し」に関して、十五日に参拝した石原慎太郎東京都知事は、「残念ですな。足して二で割るような方法は姑息で、失うものはあつても得るものはなかった」と語り、日本の政治指導者の国家主義的傾向の典型ともいえる発言を行なっている。靖国神社を訪れたのは、これらの閣僚・国会議員・知事ばかりではな

い。昨年より七万人増の十二万もの人びとが靖国に詣でたと報道されている。

同日、靖国神社への公式参拝に抗議する市民によるさまざまな集会が開かれていた。(平和遺族会全国連絡会)が主催した「八・一五 平和の集い」(於・飯田橋レインボービル)もそのひとつであった。会場は、用意された三百席を越える約五百人が集まり、多くの立ち見が出ていた。

事務局長の西川重則さんは、「追悼の名のもとに、戦争の準備をしている、自己矛盾もはなはだしい小泉内閣および国会に対して、主権者のわたしたちはどうあるべきかという課題を深く考えたい」と、集会の口火を切った。また、夫が靖国神社に「英霊」として祀られることを拒否し、あの戦死は「加害者の立場へ追いやられた死」であったと語る(神奈川平和遺族会)の石崎キクさんは、戦争犠牲者に対して「それぞれの信仰や信条に従って、それぞれの想いを込めて、自由な形で哀悼し、「沈黙の時」を持ちましょう、と参加者を促した。会場には、小泉首相の参拝中止を訴えるために来日し、靖国神社の敷地内で座り込みを続けている(韓国・太平洋戦争犠牲者遺族会)の方々の姿もあった。壁には、パッチワークキルトで作られた手縫いの「憲法第九条・戦争の放棄」の旗も掲げられていた。集会后は、その旗を持って、皆で「平和行進」を行なった。「新たな戦前の始まり」と言われる現状において、今個々人に求められているのは、このような営みを続けながら連携をとること、共に語り合える仲間を広げていくこと、そして日本の侵略戦争の歴史を直視することだ、と実感できる集会であった。

この「八・一五 平和の集い」において、昨年『祖母のくに』を著したノーマ・フィールドさんは、「死者の追悼と小泉改革」と題する「記念講演」を行なった。フィールドさんは、『天皇の逝く国で』(一九九四年)以後の諸作品においても、「政治と文学」、また「ことばと世界」の関係を深く思索し、それにもとづく言語観・現実観・歴史観を日本の読者に発表してきた。昨年邦訳された論文「戦争と謝罪」(『祖母のくに』所収)でも、その視角は全面的に展開され、「謝罪という行為の重要性」がいていね

いに論証されている。

溢れるばかりの聴衆を前にして、フィールドさんは、「自分の認識と感覚を鍛えたいという気持ちで今日参りました」と語り始めた。日本が右傾化する状況にどうにかして竿をさし、より人間らしい生き方を追求したいと望むひとりひとりととって、この講演は意味深く、また大きな励ましとなるだろう。

〈平和遺族会全国連絡会およびノーマ・フィールドさんのご快諾を得て、その内容をご紹介できることを感謝する。〉
(小川宏美・記)

【ノーマ・フィールドさん】

一九四七年東京に生まれる。一九六五年渡米。現在シカゴ大学教授、シカゴ在住。日本文学・日本近代文化専攻。著書に『天皇の逝く国で』（みすず書房、一九九四年）、『祖母のくに』（同前、二〇〇〇年）。その他、新聞・雑誌にエッセイなど多数。最近では「法律と悲しみと——女性国際戦犯法廷傍聴記（『みすず』、二〇〇一年二月）がある。「戦後日本は、3C——建設、消費、管理、construction, and control——をもって戦争に代えた」（G・マコーマック『空虚な楽園』へのN・フィールドの「まえがき」）という現実が、個々人のいかなる生活と意識、また過去に対する歴史認識を形成し、現在の社会・文化的状況を作り出しているかを分析する。

【平和遺族会全国連絡会】

一九八五年八月十五日の中曽根康弘元首相による靖国公式参拝に抗議し、侵略戦争で死んだ肉親の「英霊化」を拒否する意図を持って、翌八六年に結成された。全国に十四の支部がある。

代表・小川武満、事務局長・西川重則

連絡先・国立市富士見台一七、一一十一—一〇八 西川重則方 電話〇四二—五七四—九二一〇

死者の追悼と小泉改革

ノーマ・フィールド

おはようございます。アンニョンハシムニカ。

今日は皆さんと一緒に、このとても大事な八月十五日を過ごせることを光榮に思っております。今日のこの会場にいらしている遺族の方々、世界の戦争と平和に関してお考えになっていらっしゃる方々は、わたくしよりもはるかに体験的で、また豊富な情報をお持ちの方が多くかと思えます。ですからわたくしは、皆さまに語りかけることによって、自分の認識と感覚を鍛えたいという気持ちで今日参りました。宜しくお願いいたします。

八月十三日に靖国神社参拝を終えた小泉首相をテレビで見ながらつくづく思いました。この人はタレントとしての自分に陶醉している。それでこの場が切り抜けられるかと思っている。彼のカリスマは「裸の王様」のカリスマではないだろうか、と。「裸の王様」というのは、どの時代でもどの社会でも、非常に巧妙な役割を果たすことができます。ですから、キャッチフレーズに富んだ物言いも、今後ますます機能するのではないかと危惧しております。

ではこの小泉政権と今の日本をどのように捉えていったらよいのでしょうか。これからお話しすること、わたくしは、「死者の追悼と小泉改革」というタイトルをつけました。どうしてこういうタ

イトルにしたかは、追って順々にお話ししていきたいと思えます。

「平和」を持続的に考える難しさ

わたくしが常に気にしていることは、マスコミも含めて、戦争の問題やヒロシマ・ナガサキの原爆の問題が、敗戦記念日（わたしは、終戦記念日ということばに代わって、このことばを復活させたいのですが）の時期には語られるものの、「シーズン」が過ぎてしまうと、もつと身近な事件、例えば幼児の虐待や殺人事件、それから今日の新聞のトップ記事が日銀の金融緩和であったように、経済の低迷という、どうにもならないかのように見える話題に流されていってしまうことです。マス



コミが現実をつくる今の時代、われわれの集中力が続かないような時代に、いったいどうやったら、戦争の問題が考えられるのかということです。つまり、多くの市民が、日常的な平和の中で、非日常的な戦争の問題を考え続けることが、果たして可能なんだろうかということです。戦争犠牲者の遺族でもなく、政治的問題に特別な関心をもつ必要もない人たち、またカメラアピールとパフォーマンスにたけている小泉純一郎に惹かれているわたしと同世代の女性たちが、日常的にひしひしと迫っている戦争について、

あるいは別のことばでいえば、平和の管理の仕方についてどうやって考えていけるのだろうかということ。どうしたら考える必要が感じられるか、と言ったほうがよいかも知れません。

ご承知のとおり、事件というのは認識しやすいといえます。殺人事件であれ誘拐事件であれ、形があるからです。また戦争は一大事件とも言えます。十五年戦争——いわゆる満州事変（中国東北の侵略を指すのですが）から敗戦まで——というのも、十五年続いた事件ではないですか。平和というのは、必然的に事件のないことになります。つまり、報道の対象として消費するものがない形のないものを、どうやったら切実なものにできるのでしょうか。平和とは、平穏とは、なにも起こらない、ひたすら時間が流れていく退屈さとして感じられかねないものです。平和を実感することこそ、特殊な敏感さ、神経のこまやかさが必要なかもしれませぬ。平和であるからこそ考えたり案じたりすることができると問題があるわけです。好ましい育児や若いなどは、平和であつて、なおかつある程度の経済的余裕がなければ考えられないことです。そういうことを、どうやったらトップの課題にできるのだろうかを悩みながら、戦争で殺されたり人を殺すことを強いられたりすること、「平和」の中で人間としての可能性が発揮できなかつたり押し潰されたりすることの連続性、少なくとも関連性を考えるために、今日のタイトルを「死者の追悼と小泉改革」としたわけです。

「靖国参拝」と「経済改革」の関連性

わたくしは経済に関して全くの素人であります。一市民として、アメリカにおいてのベトナム戦争、湾岸戦争とその後の戦争、またレーガン政権時代の不況とその解消のされかたを一般的な立場から見てきました。

先月の参議院選挙で当選された田島陽子さんは、サッチャー政権の頃イギリスにいらしたようで、サッチャーの断行した経済改革は成功したから、日本でも改革が必要だとテレビで訴えていました。そうしたら、同時に当選し自民党議員になった舩添要一さんに見抜かれて、「それなら一緒にやりましょう」と言われてしまいました。つまり田島さんは、ここで、「経済改革」と「国家主義」の連動を理解していないことが明確になってしまったわけです。数少ない革新勢力の代議士が、なぜこのように軽はずみな発言をしたのかと、わたしは、大変落胆してしまいました。しかしわたたくしたちも、小泉首相のいう「構造改革」と国家主義的政策の関連を勉強しなければいけないのではないかと思います。この関連を裏打ちするものとして、昨日のテレビで、小泉首相が八月十五日に参拝しなかったこと、の批判者である平沢勝栄衆議院議員が、この問題は小泉さんの「構造改革」に響かないわけではない、と発言していました。つまり、靖国神社参拝をちゃんとやっていたら、旧態依然の自民党でも支持しただろうと言わんばかりの論理でした。つまり、「構造改革」に伴う「痛み」とは、自民党の支持者、したがって党員の一部にも降りかかってくるはずのものです。そのことから注意をそらし、また代償として機能するのが「靖国参拝」に象徴される国家主義的行為なのです。経済危機が戦争をかもし出しやすいという因果関係があることは、わたしたちは歴史の教訓としても絶対に忘れてはいけないと思います。国家主義は軍事拡大と繋がりが、軍事予算はある種の景気をもたらし、同時に、必ず福祉の削減をも意味します。

「平和」「イコール」「繁栄」という政府見解

今日の政府主催による日本武道館での追悼式でも、例によって、首相は、「英霊のために今日の平

和と繁榮がある」と語っていることでしょう。ここには問題が二つあります。以前調べたことですが、初期の頃の追悼式では、「平和と繁榮」ではなくて「平和と民主主義」でした。いつのまにか「民主主義」ということばが落ちてしまつて、「繁榮」に変わったわけです。こういうことは、あまり注目されないのですが、耳をそばだてて、目を見張つて、それが何を意味しているかを考えなければならぬのです。今もうひとつの問題は、戦後日本の経済回復というのは、「貴い命の犠牲」があつたからではない、ということ です。実は戦後しばらくの間、日本の経済は復帰しなかつたのです。しかし、米国の支配下にあり、また米ソ間の冷戦が始まつたことで、米国は、大陸においての中国革命に対抗し、朝鮮戦争を有利に展開させる必要に迫られ、日本の経済・産業復帰を必要としたのです。日本経済の復帰は、やはり、米国の戦略と密接に関わつていたのです。

また少し溯りますが、世界大恐慌以後の米国経済は、太平洋戦争勃発までは回復しませんでした。つまり、ある種の常識として、世界経済がどん底に落ち込んだ時の解消方法として、戦争以外に手がないかのように思われています。しかし、それをわれわれは運命であるかのように認めてよいのでしょうか。決してそうではないと思います。戦争を経済回復の手段とすることに對して、わたしたちは地道に注意を凝らし、「靖国参拜」問題も、このような大きなコンテキストの中で解釈していかないと、知らないうちに、若い命を戦場に送り込むことになりかねません。その意味でも、「追悼と経済改革」を重ねて考えていかなければならないと思うのです。

批判しつつ接点を持つことの必要

ここで、やつつかいなことをお話しします。近年の国家主義に対する批判のことば、運動のことば、

それは例えば「反戦」や「平和主義」などですが、それと体制側のことは、奇妙にかみ合ってしまうところがあるという点です。小泉首相も盛んに「靖国」と「平和」を一口に言います。また、閣僚の「失言」という現象もありますね。「あれは侵略戦争ではなかった。自衛戦争であった」などです。われわれアジア・太平洋戦争の被害・加害双方の歴史を引き受けようとする者は、あれを単に「失言」として片付け憤慨するのではなく、あの議論と向き合わなければならないのではないかと思うのです。それを申し上げた時に、ある方から叱られました、「それは右派がする議論であって、われわれはそういう議論に関わってはいけないんだ」と教えられました。しかしそう言われても、どうしても納得することができません。

例えば、西尾幹二氏らの〈新しい歴史教科書をつくる会〉の教科書ですが、絶対に許しがたい記述です。また全体の歴史解釈ももちろん許しがたいと思います。しかし、歴史を物語りとして面白くとらえるやり方が、かなりの人たちに受け入れられているようですし、あの教科書にある「事物の起源調べ」が示唆するように、歴史とは本に書かれたことだけではなくて、道端でも学ぶことができるし、自分の家にあるものを見ても歴史を勉強することができるという姿勢は、教育者としてわたくしは賛同できる精神なんです。その意味で、〈つくる会〉の教科書は、個々の記述の問題点を批判すると同時に、どうして全体が人に訴えるのかということ、深く考えなければならぬでしょう。どういう欲求に込えているのか、ということを分析していかなければならぬことを切実に感じます。

ことばが空洞化していく現在

次に、最近の報道などで感じたことを幾つか拾ってお話することで、問題を深めていきたいと思

います。

日本において、環境問題を語る場合、当然「自然」ということばが使われます。この「自然」ということばもかなりのくせものではないか、と思うところがあります。「環境破壊」はいけないこと、とは、抽象的な社会道徳としては当り前。でも日常的な行為や「豊かな」、少なくとも「便利な」生活を支えている構造の次元では、結果的には「環境破壊」を容認してしまふ。にもかかわらず「自然を愛する」こと、例えば「我々日本人は自然を愛する民族」などと言い続けられる。もちろん日本だけのことではありませんが、ことばの使い分けによって実状の直視がかなり避けられます。「自然」のように誰でも「良し」とすることばや概念には気をつけなければなりません。

その意味で、「平和」もまた、「自然」と同じようなことばではないでしょうか。小泉首相は、「靖国参拝」で「永久不戦決議をする」とさかんに言いますし、〈日本遺族会〉の支部や、旧軍人団体によつて建てられた碑には、必ず「恒久平和」ということばが刻まれています。「不戦」や「平和」ということばを使えば、いまの日本では何でもパスという風潮があるようです。「恒久平和」とは絶対に相容れない行為も、その矛盾が追及されずに済んでしまふ。この実態をどうやって回復すればいいのでしょうか。やはり、そのつど、そのつど、そのことばを発する責任主体を見極めて、ほんとうに「平和」を尊重しているのかを判断するしかないでしょう。また、「平和」の語法で特に注意しなければならぬのは、先に申しましたように、「平和と民主主義」が「平和と繁栄」に変更された時、「平和」イコール「繁栄」になってしまったことです。経済さえうまくいってれば「平和」なんだという安易な認識がうかがえます。

先ほど、〈平和遺族会全国連絡会〉事務局長の西川重則さんが、中曽根元首相が靖国神社を公式参

拝した一九八五年以来のことを、経済面での「失われた十年」と重ね合わせて、「悲しみが奪われた十年」とおっしゃいました。この表現をとおして、肉親が奪われた悲しみは、決してこれからも風化し得ないことを力説なさったわけです。ここで西川さんが言われたように、わたくしも、この時代が経済の側面で「失われた時代」であつたと考えます。そしてこの両方をくつつけて考えたいと思うのです。

日本が経済大国であつた時に、できたことはいろいろあつたはずですが、平和問題を考える場合、何よりも大切なのは教育ではないでしょうか。「学級崩壊」が取り沙汰されて久しくなりますが、世界で一番裕福な国が、バブル期に、教師をふんだんに雇つて、私立に行けない生徒ひとりひとりにもあたたかい教育を与えるような措置をなぜとらなかつたのでしょうか。どうしてそういうことが考えられなかつたのでしょうか。不況になつてはともそんなことは考えられないというのが常識ですが、しかしここでこそ、不況になつたからこそ、バブルという余裕を抜きに、平和は何であるか、経済と平和の関係を考えなければならぬわけです。違う意味で切実になつてくる。「平和」の中味をどうやつて回復していくかということが、大きな課題ではないかと思ひます。つまり「平和」とは、人ひとりひとりの可能性が「社会」と調和しつゞける限り發揮される状況ではないでしょうか。それは、歴史的に変化するものです。経済大国ではなくなつた日本は、新たに「充実した生き方」を考え、実践するチャンスに恵まれたと見ても良いのではないのでしょうか。解雇が取り沙汰される今、どうして「ワーク・シェアリング」（つまり、多数で職務を分かち合うこと）が政策として問われないのでしょうか。また、少子化が案じられる今、不登校生の増加に対し、カウンセラーの増加（つまり事後策）しか提供できない文部科学省の現実を前にして、なぜ教員を大幅に増やすことが考えられないの

でしょうか。

「靖国は日本人の心」——その内実は？

またひとつ気になっていることをお話しします。「日本人の心」ということがさかんに言い触らされています。サンケイ新聞などでも、「靖国は日本人の心」の問題だから、中国や韓国の近隣諸国によつて「内政干渉」をされたくないと言情的に書かれます。ひとつの国を指す時、どの日本人を指しているのか聞かなければならないはずでして、「靖国は日本人の心」と言つて、日本人全員が靖国神社を許容しているようにごまかしてはいけません。

わたくしは、ベトナム戦争の時代にアメリカの大学生でしたから、その際によく「国賊」ということばが使われたのを覚えています。あの時に反戦を主張することは、非国民と見做されることを身近に感じました。湾岸戦争の際の「黄色いリボン運動」は、戦争への賛同を強要するものであったことも記憶に新しいことです。日本に限らずどの社会でも、戦争は意見の統制をもたらしめます。逆に、国民を統制するのに戦争またはその可能性ほど便利なものはありません。そこで「靖国」問題に関して、わたくしはあえてサンケイ新聞の論調に開き直つて、「まさにそうです。これは日本人の心の問題です。すよね」と申し上げたくなります。やはりこれは、近隣諸国にどうこう言われたからどうこうすべき問題ではなく、あらゆる日本の市民が、主体的に、世界とどう接したいのか、世界にどう評価されたいのかという意味において、「日本人の心」の問題なのです。同時に、自らの社会が「生」と「死」をどう位置付けるのかと、これまた「日本人の心」の問題として論議されるべきでしょう。このことは、靖国神社へ死者に会うために、それに、平和を祈願するために参拝する人たちとも対話を持たな

ければならないと思います。また、小林よしのり氏らの本を買う若い人たちとも、やはり接点を見出す必要があるでしょう。

ことばというのは、ひとつの意味があるわけではない。「日本人の心」の内容もひとつではないし、それを一方的に規定することは誰にもできないはず。その内容を問うには、日常的な緻密で煩瑣な努力が必要です。付き合っていくことによって接点を見つげながら、お互いのことばの意味を確保し明快にし、価値観を変えていくことです。それに比べて、批判し反対していることのほうが楽なんです。今の世界情勢と、日本の情勢を思えば、国家主義的動きに反対することが絶対必要なことは明確ですが、矛盾することを申し上げるようですが、反対と同時に、対話への新しい接点を見つけていかなければ、むなし少数者になってしまうでしょう。むなし少数者になってしまうことは、圧倒的多数がまた犠牲を被ることもなります。ご存知のように、アジア・太平洋戦争下でも、少数者は治安維持法などで殺されたり、転向を強いられたわけです。少数者の責任として、われわれと反対意見を持つ多数者との接点をどう見いだしていくかは、心理的にもしんどい作業だと思いますが、避けるべきではないでしょう。「日本人の心」や「恒久平和」「死者への哀悼」など、異議を申し立てにくいことばの意味をあえて問い返さなければならぬわけです。

「無責任と差別の論理」としての「靖国」

今日改めて、「靖国」の論理とは何なのだろうと考えますと、ここで大きな矛盾にぶつかります。

「靖国」はある意味では、「平等」を謳う場です。国家の為に貴い命を犠牲にすれば、女性であろうと下層階級の者であろうと、誰でも神様になれるというわけです。小泉首相がいう「死ねば誰でも仏」

というのは、皮肉にもこの特殊な神社の論理と合致しています。戦前の天皇制国家の元植民地の人たち、韓国や台湾の兵士も平等に祀られるというわけです。しかし、ご承知のとおり、原爆の被爆者や空襲の犠牲者らは祀られていないわけです。つまり「靖国」の論理というのは、一方に平等の原則があり、一方に峻別と差別の原理があるというやつかいなところで、だからこそ、巧妙に機能する場となつていえると言えるでしょう。

小泉政権をひとつだけ評価できるとしたら、靖国問題をもう一度日本人たちに、さらに世界の人たちの意識に浮かび上がらせてくれたことではないか、とわたしは思いたったのですが、八月十三日に実際に靖国を参拝したことで、問題の焦点をぼかしてしまいました。しかしこのようなやり方は、小泉首相に限らず、戦後日本の政治指導者のひとつのパターンであると考えられます。「自衛隊を合憲である」としてしまつた経緯にしても、言葉遊びのようなごまかしがありましたし、悲しいことに現在では、それに反対する政治勢力も少なくなつてしまいました。また例えば、在日外国人の指紋押捺の件でも、わたしも子どもの頃やらされたんですが、政府の見解は、押捺するときのインクが汚いために抵抗があるんだらうから、無色のインクで、その透명한指紋にプラスチックのカバーをかければよしとしたのです。この対処の仕方、大人に対して大変失礼なものです。また、中曽根康弘元首相の時の、「靖国神社で二礼をせず一礼をすれば合憲になる」という政府見解は、最近また繰り返されています。このような考え方は、国民を完全にばかにしたもので、許されるべきではありません。

国民国家における「政教分離」の重要性

次に、とても大切な「政教分離」について考えたいと思います。

もうかなり前になりますが、アメリカの最高裁が、クリスマスシーズンのショッピングモールに飾られたキリスト生誕の置物が宗教的シンボルではない、という驚くべき判決を下しました。それによって、公共的な場に、この種の造り物を置くことが可能になったわけです。つまり国家は、明らかに宗教シンボルの宗教性を否定してまでも、宗教の統制力を手放したくないわけです。「自然」や「平和」と同じように、多数が好感を抱くシンボルや概念は柔軟に利用できます。政治と宗教が分離して、いないことに気付かずに、みんなの感性が麻痺してしまっていると、国家の指導者が危機を前にして、宗教色が濃厚でありながら習慣として解釈される行為（例えば日本人なら靖国に参拝するのが自然であるように）は、強力な統制原理になります。国家は宗教に関与してはいけない、また国家は個人の信仰を妨げてはいけないという、どちらも貴重な理念です。しかしながら、現存の国民国家は、いたるところで「政教分離の原則」を崩していると言えるでしょう。

戦争体験からいかに学ぶか

（つくる云々）の人びとは、過去に起こったことを今の価値基準で判断してはいけないと主張したうえで、日本の植民地支配と参戦の歴史を正当化しています。この一見常識的な議論を、わたしたちは取り上げるべきだと思うのです。それはどういうことになるのでしょうか。

この問題を考える時わたくしが思い出すのは、「日の丸」「君が代」法制化問題の時に発言された、日本の中世史の研究者でいらつしやる網野善彦氏のことばです。彼はインタヴューで、「支配するよりは、支配されるほうがよかった」と明言されました。わたくしたちは、侵略戦争か自衛戦争かの議論をするとき、ここまで考えを押し進めないといけないのじゃないでしょうか。確かに、十九世紀以

降のヨーロッパの植民地体制においては、「近代国家日本」は、後進国で苦しい立場に置かれていた。この現実是否定すべきではないと思います。しかし、そのような立場から、今度は、近隣諸国を侵略し植民地化していくほうにまわってしまった加害の面を、否定することもできません。わたくしたちが直面している問題は、どうしても、これをどう理解するかということです。「自衛」のために「侵略」は必要だったのでしょうか。他の国に支配されることを、決して軽々しく薦めるわけにはいきません。でも、そのような状況に置かれた場合、どちらの立場を選ぶかということをや、わたしたちは普段から考えていなければいけない。いや、この二者択一を迫られる前に、どういう準備をしておかなければいけないのかということをや、地道に議論していなければいけないのだと思います。

また、東京裁判は勝者の裁判じゃないかとよく言われますが、わたしは、この場合も、「確かに、勝者の裁判であつた」と認めるべきだと思つたのです。極東軍事裁判に関しては、さまざまな欠落や過ちを指摘することはできませんが、裁判全体を否定すべきではないと思います。アメリカの支配下で、元従軍慰安婦の問題は取り上げられなかつたし、天皇の戦争責任も免責されたわけで、この人権史にとって重要な裁判が、アメリカの国益によつて左右されてしまったことは確かです。かといつて、第二次世界大戦後の戦犯裁判で明確にされた「人道に対する罪」というのは、とても大切な理念で、国際的正義を追求するためには欠かせない理念です。

小泉首相の強いる「痛み」——「貧しい者はますます貧しく」

〈つくる会〉の歴史教科書が採択されたのは、ご承知のとおり、東京と愛媛の養護学校の一部です。また、三年続いて日本の自殺者は、三万人を越えたという統計が発表されています。日本はいくら不

況が続いているとはいえ、世界の中ではまだまだ裕福な国です。シカゴから毎年来るわたくしには、目に見える限りでは、東京はシカゴより豊かな都市に思えてしまいます。なおかつ、この国に三万人の自殺者が毎年出るので、養護学校で（つくる会）の教科書を使って教えられていく生徒たち、社会によつて見捨てられ寂しく身を捨てていく自殺者たち、それに重ねてわたくしには見えてくるのが、特攻隊の若者たちです。どれをとつてもグロテスクな悲惨を感じざるを得ません。もちろん、厳密には、この三者ともセットでは捉えられません。特攻隊員の死は、強いられた死としてわたくしは解釈しているのですが、この強いられた死は、国家によつて美化される死でありました。しかしながら、バブル崩壊後の日本で、絶望して自殺していく人たちの死は、国家にとつて美化の対象にはなり得ない。原爆や空襲で亡くなった人びとの、謳われざる死と重なるのではないのでしょうか。つまり、祀られない死、英雄化されない死、これはまさに小泉首相の「構造改革」が導き出す結果にほかならないでしょう。先の参議院選の最中に、小泉首相は、「構造改革」は「痛み」を伴うとさかんに言っていました。その「痛み」の中味がわからない、と時折指摘されましたが、中味は本気で追求されなかつたように思います。

昨日の新聞（朝日新聞、夕刊）に、来日した米国の経済史の研究者であるアンドレ・グンダー・フランク氏の、次のような発言が載っています。「いつの時代でも、危機は全員が苦しむ形ではやつてこない。貧しい者はますます貧しくなり、富める者は自分の富を守ろうとする。経済危機の時代に格差が広がるのは歴史の教訓だ」。フランク氏のいうとおり、養護学校に通う子どもたち、リストラされて家族に顔向けできなくなつて死を選ぶ人たち、そういう人たちは、世界の資本主義経済の流れで、国家の政策によつてますますすみじめな所に追い込まれていくわけです。先ほど「靖国」の論理である

「平等性」のことを申し上げましたが、あの「平等性」の中に、無責任の構造が内包されているのではないのでしょうか。わたくしは決して、A級戦犯だけがアジア・太平洋戦争の責任を負わされるべきだとは思わないのですが、戦争の指導者と、加害者として戦争に駆り立てられた被支配者の間には、責任の違いがあります。「靖国の平等の論理」は、実は、無責任と差別の論理です。

身体感覚と化した「日の丸」「君が代」の危うさ

日本ではすでに「日の丸」を掲揚し、「君が代」を斉唱することが、学習指導要領で、そうとう強制されています。今から十年ほど前に読んだことが思い出されます。ある高校生が、最初は上級生が「日の丸」の旗、つまりものに頭を下げるのが非常に不思議に見えた。なぜものにお辞儀をするのだろうかと思つた。でもその光景が繰り返されるうちにごく自然になつた、と語っていました。この発言は、非常に大切な指摘ではないでしょうか。若い人たちが、「日の丸」に頭を下げるのが、身体感覚として自然な行為となつたとき、それを国家主義に結び付けるのは、たやすいことに違いありません。

小泉首相の「構造改革」ですが、例えば道路公団などを改革していくことは無論必要だと思ひます。また、国は、高齢化社会が必要とする雇用の場を積極的に準備すべきでしょう。つまり、改革の質の問題、誰のための改革かということが問われなければならないのです。やはり、平和の年味とは、いかに人間的に生きられるかということ、政策のレヴェルで、個人個人の行動のレヴェルで、また地域のレヴェルで、具体的に実践していくことだと思ひます。人間の幸せ、人間の可能性をどうやって発揮できるかということが、平和の年味であるべきだと思ひます。

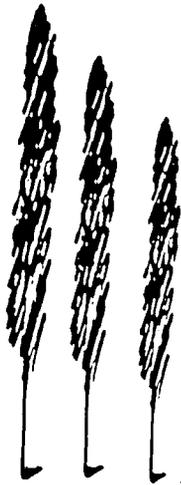
人間の尊厳としての「聖域」

最後に、小泉内閣の一番のキャッチフレーズは「聖域なき構造改革」ですが、果たして「聖域がない」ということは、ほんとうに良いことなのでしょうか。

「日本人の心」という場合、「どの日本人か」と聞かなければいけないという話を致しましたが、それと同じように、「どの聖域か」と、わたしたちは問いたださなければいけないと思います。例えば、八月十五日に首相の靖国神社参拝を望む人にとっては、近隣諸国による内政干渉に依存してしまっただけという意味で、新しい「聖域」がつけられてしまったと言ってしまう。

わたくしは、人間の世界には「聖域」があると思います。それは人間の尊厳です。それまでも崩していく「改革」であってはならないのです。小泉首相の「構造改革」は、人間の尊厳を崩すことのためらわない、浅はかで非倫理的な政策に思われて仕方ありません。ですから、人間の基本的な尊厳を確保していくことを政府に要求し、またお互いにその中味を探究して、突き止めることが大切だと考えました。

今日は皆さまと、結論の出ていない問題を、しかしながら現在と未来のわたしたちの在りようを決定的に左右するであろう問題を、ご一緒に考えられたことを、大変うれしく思っております。またいろいろお教えいただけただけなら幸いです。



【質疑応答】

◆今度、東京都教育委員会が、校長・教頭の下に主任というのを置いて、主任を管理職に位置づけることにしました。つまり、校長・教頭が経営層としたら、主任は指導層として一般の教育を行うわけです。そうすると、東京都全部で、このようなシステムに基づいた構造的支配が出来上がってしまうことになりました。またそれは東京に限らないことだと予想されます。文部科学省が中心になってこのようなシステム作りをしていることを、わたしは大変危険なことだと思っております。今日、会場の皆さんにピラも配らせていただいております。

ナチズムにおける優秀な指導者アイヒマンも、管理の中で職務を忠実に果たしていたと思えます。このようなことについて、どう思われるかお話しください。

先ほど申し上げた「支配するより、支配されたほうがいい」というのは国家レヴェルのことですが、具体的にいえば、植民地をつくるよりは、植民地になったほうが人間としてはましではないか、ということでした。しかしながら、そのような選択は絶対に迫られたくない。ですから、そこにいかないために、いろいろな係わり方、連帯の仕方が試みられなければならないでしょう。例えば、脱政治化しているといわれるアメリカの大学生が、今、組合運動にかなりの関心を寄せています。日本に同じような動きが見えないのが残念です。あらゆる所で、抑圧的組織に対抗するために、また管理されることに抗するために、団結する必要があるでしょう。わたくしは時々、今日のような集まりでは、天皇制の問題や「日の丸」「君が代」のことを話せるけれども、近所の奥さんどうしでは、そういった政治的問題はどうしても話せないということを開かされます。しかし、集合住宅などでも、場を見つ

けて、最初に口を切ってみる勇気が大切だと思います。最初は拒まれても、懲りないしぶとさという
か、根強さが必要ではないでしょうか。また違う意見を持つている人の話を聞く心の用意がないと、
わたしたちのことは相手に通じないですよ。組合運動のような場と、日常生活の場との両方で、
今日お話ししてきたようなことを語っていける雰囲気をつくる必要を感じています。

◆吉村と申します。昭和天皇が亡くなった時代に、「日の丸」「君が代」の問題が出ている。A級戦犯の問題も出
ている。本当は天皇に一番責任があると思うのですが、一般にはよく、マッカーサーに免罪されたとしてこの問
題が終えられています。先生はどうお考えですか。

大事なご質問です。構造的に戦争責任を考えた場合、例えば、A級戦犯だけの責任ではない、また天
皇だけの責任でもない、ということができませんが、これは、A級戦犯に責任がないとか、天皇に責任が
ない、ということと全然違いますね。構造的な分析と、個々の事件や人物の分析の両方が必要だと思
います。つまり、天皇が果たした役割は、個々にも追及しなければならぬし、同時に、構造的に日本
が世界の中でどのような位置に置かれていたかを考えなければならぬ。

わたくしの昭和天皇の戦争責任に関する意見は、もちろん「責任がある」というものです。アメリ
カ政府によって免罪されて、天皇に戦争責任がないことになり、「天皇に責任がなければ、日本国民
の誰にも責任がない」という構図が延々と今も続いている。これは大変危険なことです。

昨年十二月に行われた「女性国際戦犯法廷」では、天皇・A級戦犯、つまり支配者層らを被告人に
設けました。しかし、この設定は「慰安所」を利用した個々の兵士に責任がなかった、ということ

はありません。指導者とは質的に違う責任なのです。これを拡大すれば、国民一般にも戦争責任があるということですが、これを未来のために有意義にするには、やはり歴史教育が欠かせないでしょう。

そこでドイツのお話をひとつします。わたくしの日本の友人のお嬢さんが、ドイツの青年と結婚しました。式を挙げるために、おばあちゃまやおばさんを含む日本の家族がドイツに行きました。式後は楽しい観光でしたが、青年は、みなさんを「強制収容所」にも連れて行ったそうです、彼にとつてこれは当然な行為というように。学校から何度も来ているから自分は外で待っているけれども、皆さんは見ただけ見て下さいと言って、芝の上に寝そべっていたそうです。

友人は、彼が特別なわけではないと言います。やはりこの点でも、日本とは決定的に違いがあると思わざるを得ません。戦後ドイツの歴史教育の素晴らしい功績だと思えます。つまり、常識として、海外の知り合いや友人を「収容所」に案内することに匹敵する行為は、いまの日本では想像もつかない。(つくる会)などは、「子どもたちに誇りを持たせたい」ということを言いますが、自ら成員である社会に「誇り」を持つとはどういうことかを、改めて考えなければなりません。この「誇り」ということばも、わたくしは切り捨てたくないのです。人間の尊厳を大切にすることは、誇りの根拠ではないでしょうか。

◆国立市に住む主婦です。ノーマさんの歴史の認識の仕方についてお聞きします。今日のお話のなかでもすでに、(つくる会)の歴史教科書の「歴史を学ぶとは」というまえがきに触れていらっしやいましたが、そこに、彼らは、「歴史は真実を知ることよりも、当時の生きていた人びとがどのように考えていたか、またどのような状況にあったかを知る」とた、「とはっきり書いています。このことについてどうお考えですか。

その言い方には、巧妙なねじれがあると思うのです。当時の人たちがどういう状況に置かれていて、どういう思いを持っていたかを検証することは、歴史の一部で欠かせない作業だと思うのです。けれども、そうすることが、真実を追究することと無関係だとは、決して思いません。第一、「過去の事実を知ること」でさえ、決して自明なことではありません。過去の事実、過去の人の考え、出来事と出来事の関係、国と国との関係、このどれをも理解しようとするとき、現在の価値観や知識から始めるしかないのです。今わたくしたちの置かれている状況に敏感であろうとすることで、過去に対する理解も深まるはず。過去と現在は常に照らし合わせなければなりません。そうしてわたくしたちの認識は育つていくものです。

〈つくる念〉は一見相対主義に思えます。国、時代、個人、それぞれの歴史は異なるのだ、と説く。歴史は固定的に考えてはいけない、とも。しかし、〈つくる念〉の歴史教科書の中味は、全然相対主義ではありません。「日本」という流動的で複雑な存在を固定化し、その「日本」の視点ですべてを判断しているわけですから。

しかし、この相対主義的なまえがきだけをとつても重大な問題があります。個々の歴史が異なるものであるから、固定できないものであるから、現在の価値基準を導入すべきではない、という論の進め方をとっています。歴史の流動性とそれに対して判断を下すことと本質的に矛盾しているわけではありません。判断する行為自体、能動的であり、わたくしたちが知識と認識を深めれば深めるほど、その行為も豊かに変化していくはずです。わたくしは、これを「何でもあり」の相対主義とは区別したいと思います。やはり人間の（特定の「何々人」ではなく）尊厳、人間の可能性を視野から外しては歴史を学ぶことはできません。

『祖母のくに』

ノーマ・フィールド著

大島かおり訳
みずす書房刊

前作『天皇の逝く国で』において、

「ヒロヒトの死についての照察」を試みた著者によるこの本は、三つのエッセイ「祖母のくに」、「秘書の話」、「嫁ならざる嫁」と、文学評「東京の『ジェイン・エア』」、それにシカゴ大学の新編入生への講演録「教育の目的（巻末に原文）」と戦後五〇年目の論文「戦争と謝罪」の六作品を収め、前作同様、日本の「経済的成功のもとでの、生きながらの死とでも言うべき日常の質」を問う。

*

「この本なしには、私は生きていかれなかつた」——この大胆な告白から始まる文学評「東京の『ジェイン・エア』」は、著者の内なるジェイン・エアを描く。

父はアメリカ人、母は日本人。戦後日本に「混血児」として、「容姿、言葉遣い、振る舞いからして、満足なアメリカ人でも日本人でもない」ことを他人から意識させられて育った著者は、それを「不当に感じ、怒りと情けなさの虜」になった。しかし『ジェイン・エア』が説く個人の信念と内面性の尊重に傾倒していくことで、「そのつらい時期を切り抜けた」。

「文学を考えるとということ、ある作品を弁護するか、捨てるかの問題ではなく、作品の書かれた時代、読まれる時代、個々の読者の状況を射程に入れたうえで、描き出される可能性の地平線をみいだすことではないだろうか。いうまでもなく、これはたんにアカデミックな作業ではありえない——考察する文学作品を、単なる「研究対象」にはなしえない。対象に主体的にかか

わり、それゆえに対象から、何らかの決定的な影響を刻印されるような関係、それが著者と文学の関係である。

この関係は、身障者の黒人セプテンバーとの出会いを描いた「秘書の話」、義父を哀悼した「嫁ならざる嫁」にも表われている。

「祖母のくに」は、寝たきりになった祖母に付き添うエッセイ。台所から家じゅうに広げられた愛情、それによってつくりだされていた賑やかな空間、丹精されて気持ちのよい庭……。寝込む前の祖母の豊かな日常は、文学作品と同じ質をもつ。それは、「経済的成功のもとでの、生きながらの死とでも言うべき日常の質」への抵抗でもある。

著者は、祖母の日常に代表される「祖母のくに」に、限らない愛情を抱く。『天皇の逝く国で』と共に熟読してほしい本である。

二〇〇〇年五月刊。（四六判・二〇四ページ・二〇〇〇円）
（小川宏美）



靖国参拝は亡国の道 公式参拝に怒りの声

八月十三日の小泉首相「繰上参拝」には、予想されたとおり、中・韓両国から激しい抗議が寄せられたが、「参拝」を阻止しようと、要請を続けていた市民たちも、怒りを爆発させた。

〈韓国・太平洋戦争犠牲者遺族会〉をはじめとする市民たちは、八月十一日から靖国境内でハンスト。遺族の意思に反して父親が合祀させられていた李熙子さんは、合祀の取下げを靖国神社事務所に要請したが、右翼は暴言を浴びせた。李さんは、「父は強制的に徴兵され、殺された。合祀しないでほしいと言っているだけなのに」と涙で抗議、日本人の支援者たちも同調して抗議のハンストとデモを行った。また反対集会も各地で開かれた。各集会では、閉会后、「参拝抗議・軍事大国化反対」のデモを行ない、抗議を一過性のものに終わらせないことを誓い合った。

全国基地研が地位協定見直し要請

米軍基地を抱えている全国十四都道府県の知事が参加する涉外関係主要都道府県知事連絡協議会（会長・岡崎神奈川県知事）は、八月二二日、定期総会で日米地位協定の見直しなど、六つの要望を中心とした一二〇項目の「基地対策に関する要望書」を国に提出した。

安保五〇年、「基地」は言うまでもなく「安保」と密接に結びついているが、六月の沖縄女性暴行事件で問題になった「犯罪を犯した米兵の身柄即時引渡し」「米軍機の民間空港の使用禁止」「飛行訓練の制限」など、懸案事項の数々を、改めて十四都道府県の共通の要望として要請したものの、

米軍艦が日本の四港に一斉に入港

米海軍横須賀基地を母港にする第七艦隊所属の艦船五隻

が、八月二八日、清水・名古屋・和歌山・姫路の四つの民間港に一斉に入港、市民を驚かせた。

これまで日米防衛協力指針(新ガイドライン)に基づき、北海道・室蘭港など民間港への入港は行われてきたが、同日一斉入港は初めて。西日本をねらいうちしたのは、朝鮮半島や中国をにらんだデモンストレーションであり、「非核証明書」を求める「神戸方式」の空洞化をねらったもの。民間港の軍事利用や、新ガイドラインの具体化を計るねらいとして、全国に抗議の声がわき起こっている。

米国防省 駐欧米軍一萬五千人撤退計画

欧州にはアジア・太平洋地域同様、十万人体制の米軍が駐留しているが、このうち一萬五千人を撤退させる構想を、米軍事専門誌ディフェンス・ニューズがインターネットで報道。残念ながらアジア・太平洋地域は「アジア重視のため」現状のまま。

へつくる会教科書批判は成功したが

数億円を注ぎこんで全国で講演会・懇談会を繰り返して

いたへつくる会教科書。全国で採択されたのは、わずかに〇・〇三九%。市民運動としては珍しく反対運動が成功したが、東京都は養護学校三校が採択。「保護者がまとまりにくい」「反対意見を言いにくい」状況を逆手にとった「差別」と、石原行政非難の声は大きい。

文科省 一〇高校を理系英才校に指定構想

子どもの理科離れをくい止め、将来の科学技術の担い手を育てようと、文部科学省は来年度、九〇億円の予算で全国一五〇〇校程度の小・中・高校を実験設備など充実の理科教育拠点校に、また、公私立高校二〇校を「スーパーサイエンススクール」に指定、一校に三千万円程度を助成する方針を発表。落ちこぼれ、登校拒否対策が不十分な折、議論も起こっている。

保育所の企業化?

東京都の「認証保育所」制度

東京都は、「産休明けから預けたい」「残業の時も預かってほしい」「通勤途中の駅前にほしい」という都民の声に

応えるために、都独自の「認証保育所制度」を新たにスタートさせると、七月一日、広報。八月一日、三國が開所し、石原都知事の開園式参加が大きく報道された。これは、小泉政権の目玉の一つ、「待機児童ゼロ作戦」とも呼ぶるものとして期待されており、東京都は、今年度の方針として、駅前型を中心としたA型を十か所、家庭的な保育ができるB型を百か所設置する予定、と称しているが、本当に喜んでいるのか。今まで認知されなかった無認可保育所も認証されるようになったのは一歩前進だったが、「認証」保育所と「認可」保育所の間には表のような違いがある。

一見すると、「認証」のほうが利用者の希望にずっと近いように見えるが、事故を多発、死者まで出したベビーホテルに近いのでは、という疑問を拭いきれない。認可保育所の入所難は周知のとおり。これに対し「認証」は直接申し込めばよく、保育料は保育所が自由に設定する。これに上限はあるが、下限はない。東京都は「事業者間の競争を促すことにより、事業者の創意工夫が生かされる新しいスタイルの保育所の展開とサービスの充実が期待される」と説明しているが、これは「資本主義論理に立つ保育所」を意味するもの。政府は、この方法を全国に波及させていく予定だが、ベビーホテルの二の舞にならないよう、十分な

認証保育所と認可保育所の比較

項目	認証保育所	認可保育所
定員 対象年齢	認証保育所A型は駅前に設置することを基本とし、大都市特有の多用なニーズに応えます。定員は20人～120人、そのうち0歳～2歳の定員1/2以上。 B型は、保育室制度からの移行を中心とし、小規模で家庭的な保育を目指します。定員は6人～29人で0歳～2歳のみです。	認可保育所の定員は20人以上です。
0歳児保育	0歳児保育を必ず実施していただくことにより、都民のニーズに応えます。	0歳児の受け入れをしていない保育所があります。
基準面積	弾力基準として0歳児、1歳児の一人あたり基準面積を2.5㎡まで緩和します。	0歳児・1歳児の一人あたりの基準面積が3.3㎡必要です。
保育料	認証保育所が徴収します。なお、料金は認証保育所で自由に設定できます。(ただし、上限があります。)	区市町村が徴収します。
申込み方法	利用について認証保育所と保護者の間で直接契約していただきます。	区市町村が決定、認可します。
開所時間	すべての保育所に13時間以上の開所を義務付けています。これにより、二重保育の解消につながります。	区市町村が決定します。11時間を基本としています。
サービスの説明	各認証保育所で、契約時に保護者へ「重要事項説明書」を渡し、サービスの内容や施設の概要、事業者の概要などを説明することを義務付けます。	サービス内容についての説明義務は特に定めていません。
利用者・都民 に対する 周知	各保育所で、利用定員や開所時間などサービス内容を明記した「認証書」と、基準に適合しているという「適合証」を、玄関付近など利用者の見やすい場所に掲示することを義務付けます。	認可保育所に対して設置認可書を交付していますが、掲示することを義務付けていません。

監視が必要。皆様の具体的な情報をお待ちしている。

松井やよりさんの講演中止に抗議集会

「女性国際戦犯法廷」を成功させる中心となった松井やよりさんに右翼からの嫌がらせが続いていたが、八月十日松井さんが千代田区から依頼されていた講演会が、開催の一週間前に、突然中止を申し渡された。理由は、右翼が区役所に圧力をかけたため。この出来事に、市民は、講演予定日の当日、同じ時刻に、開催予定地のすぐ近くに会場を借りて抗議集会を開いた。

急な呼びかけだったのにもかかわらず、会場は超満員。松井さんは、まず予定されていた講演と同じ内容の話をした後、この「中止」の意味を問ひかけ、活発な会場発言で盛り上がった。内容は次号で紹介する。

なお、この問題の責任を、同区の女性問題担当者が問われ、進退問題まで浮上、憂慮されている。

〈WINWIN〉が参議院選を分析

勝利する確立の高い女性候補に資金を送って援助している(WINWIN)(赤松良子代表)は、大阪府知事選、千葉県

知事選など、連戦連勝を続けていたが、今回の参院選では十二名を推して当選は二名。八月十七日、情勢を分析、今後の方向性を議論した。

・「小泉旋風」がすさまじく、加えて非拘束名簿式になったため、メディアに登場するタレントか、著名人、または大組織をバックにした候補者が有利となった。

・不況の浸透で、一百万円の寄付が厳しいという人もいる。堂本選挙に続くカンパ募集で、募金額減になった。

・拠金すると支持政党が分かるので抵抗感を持つ人がいる。推せんは新人に限るというルールがあるが、ベテランが落ちて新人が当選するという不条理が生じたのでは。

・推せん委員に加わりたい。推せん委員名を公表すべき。

などの意見が出、下村満子副代表は「推せん委員名を公表しないことは鉄則。賛同人以外の会員名も守秘義務がある」と考えている。これは、誰に拠金したかという情報も守られることを意味する」と説明。赤松代表も「勝つ可能性があるという理由だけでは推せんしない。WINWINの理念に沿う人が求められている。人間性を中心に選考している」と発言。推せん候補を招いてのミーティングを開く、地方でも活動を、などの提案が出た。

(同会ニュース20号より)



首相の靖国参拝に抗議の集会

今年も8・15近辺は、アジア太平洋戦争是認派と反省派の各種集会在開かれた。(日本婦人問題連合会)は、八月一日、二〇〇二年戦争は「めん女性のつどい」を東京ウイメンズ・プラザで開催。笠原十九司・都留文科大教授の講演「(つくる会)教科書のねらいと憲法九条」のち、靖国参拝中止のアピールを採択した。八月十五日も各所で催しがあったが、最も盛り上がった一つは、東京・飯田橋レインホールで開かれた「小泉首相の靖国神社参拝を問う・平和の集い」だった。

平和遺族会のメンバーは、「日程を変えればよいという問題ではない。軍事大国化を進める小泉政権は危険」(中山敏雄・群馬平和遺族会事務局長)、「遺族にとつて悲しみの風化はあり得ない。(英霊)に祀り上げて欺まんな追悼を行

ないながら、日米共同宣言、新ガイドラインと、戦争準備を着々進める政府や国会と闘おう」(西川重則・平和遺族会全国連絡会事務局長)、「私たちの肉親は英霊ではなく、加害者の立場に追いやられた犠牲者だ」(石崎キク・神奈川平和遺族会会員)などと強く訴え、一分間の「沈黙の時」を持ったのち、ノーマ・フィールド教授の記念講演に聴き入った(講演内容は五七〇七六ページに掲載)。(T)

問われた奴隷制とシオニズム 世界人種差別撤廃会議

南アフリカのインド洋に面した港町ダーバンで開かれた国連主催の世界人種差別撤廃会議は、先行した約九五〇組織のNGOによる会議と後半併行して、八月三十一日―九月七日政府代表会議(一九四か国、一万四千人が参加)が開かれたが、被差別諸国と先進国の利害が対立。「政治宣言」と「行動計画」は、会期をすぎた八日に採択された。

この会議は開催前から「奴隷制に対する賠償問題」と「パレスチナ問題(シオニズム)」が主要課題としてあげられていたため、パウエル米國務長官は出席を拒否、四日には米

国政府代表団も引き上げた。

アフリカ諸国は元首が出席、ナイジェリアのオパサンチヨ大統領は、「奴隷制の犠牲になった人びとが負った歴史の汚点に対する責任を負わなければならない」と、欧米諸国の賠償責任に言及した。十七—十八世紀に奴隷船に積み込まれて大西洋を渡ったアフリカ大陸出身者は一千万人とも一千五百万人とも言われ、アフリカ系米人の米国人人口に占める比率は一二％。九六年の統計では囚人率は六二％に達する。貧困と差別が犯罪に走らせる一方、事件が発生すると、まずアフリカ系が疑われるという連鎖がある。そして国際経済では、かつての「奴隷購買国」と「植民地支配国」が圧倒的な優位を示していることが、国連の特別会議で初めて明らかにされたことは銘記したい。

悲惨を極めるパレスチナ問題も、ユダヤ人差別を、パレスチナにイスラエル国家を建設することによって拭おうとした史実は消せない。「シオニズムは人種主義」とアラブ諸国が打ち出したのに対し、イスラエルは席を立てて帰り、〈負〉の要素を持つ欧米諸国だけでなく、日本政府代表まで沈黙を続けたのは残念だった。

過去の「罪」への「補償」を求める被害国に対し、英・

蘭・ポルトガルはじめ加害国は反対、「政治宣言」は次の四項目にとどまった。

- ◇ 奴隷性と奴隷貿易は人類の歴史の大きな悲劇で、人道に対する罪と認める。それは人種差別や排斥主義などの原因だ。
- ◇ 植民地支配も人種差別などにつながり、アフリカやアジアの人びとは今もその犠牲者であり続けていることを認める。
- ◇ 関係国の道徳的責務を考え、その過去の罪が招いた結果を改めるために、適切で効果的な対応を求める。
- ◇ 貧困を減らすため、先進国と国連などに新規の財政支援を求める。

この会議では、日本の「部落」「アイヌ」も問われることになっていった。インドの「カースト」とのからみで削除されたが、弱みを持つ日本政府は、終始沈黙を続け、NGOフォーラムで北海道ウタリ協会の秋辺得年副理事長が、アイヌ民族を先住民と認めない日本政府を批判したのにも答えなかった。

(E)

「リップ合宿」

春は弥生、十七、八の両日、那須温泉でリップ合宿があった。

殺生石黒累々と雪残る

「奥の細道」に出てくる殺生石は、野原の真中に、ポツンとある大きな石ではなくて、斜面のあちらこちらに顔を出している、黒い石の群れであった。あたりに有毒ガスが立ち込めている気配はなかったが、それでも地下からのガスの抜け道らしいものを見かけた。

私たち女性の怨念のガスは、今だって、ひそかに吐き続けられている。それがあの昨年の音羽事件や、天理よろず相談所病院の悲劇となって、世間の耳目を集めねばならなかったような気がしている。

さて、合宿ではどんなことがあったのだろうか。

着いた日にほとんどの人が、宿の近くのニキ美術館に行った。ニキ・ド・サンファルの作品の展示をしている。美しい長屋門から中に入ると、庭の奥に入口があり、大小さまざまな色とりどりの彫像がある。大仏さまもあるし、『エジプトのナイル川の神もある。『赤い魔女』という作品は、やはりというか、胸のあたりに聖母像が埋めこまれていた。

温泉とごちそうの後には、自己紹介がてら、いろいろな話が飛び出した。中でも、文字通り花の咲く話を、三木草子さんから聞けた。

「メキシコでは三月八日の国際女性デーに男性が女性に花を贈る習慣がある。日本の年賀状の習慣を国際女性デーに出すことにしたらどうかしら。」

三月三日の女のストライキは、「拒否」による主張だけれど、「女たよりの日」とでも名づけて、さしあたり女同士でハガキの交換をやれば、花東のおまけが来るような「獲得」の成果があるかもしれない。何よりも国際的な連帯ができれば、すばらしい。両方向をめざして、結果に注目したい。

話の中に、関西と関東の文化の違いのようなものを感じたのがあった。ご自身の離婚問題を話題にのせた方が「離婚パーティー」を口にされた。深刻なことを何だか笑いの種にしてしまう才能は、関西独特のように思われた。

その時は、まだ候補の一人にすぎなかった堂本あき子さんが、一週間後には千葉県知事となったが、彼女への支援も話題になった。千葉県に友人のある人に声をかけよう。そして、私も二人の友人に声をかけた。手紙も出した。針の穴から洪水を起こしましょうと。

後日、百歳までリブ合宿などという、恐ろしくなるような手紙が舞い込み、冥土へ行っても、自称魔女たちの集い

が続いたら、エンマさまも腰を抜かすかしらと、少しばかり楽しみ。

私の参加は、静岡の日以来で、あの時は帰りに、斎藤千代さんと、七・五・三で賑やかな神社の奥山をどんどん登っていったところ、静岡空襲の慰霊碑があって、ごいっしょにお参りした。かたわらには、B29搭乗員の碑もあった。当時の敵兵、しかも攻撃をしにやってきた米兵を弔ったことについて、帰ってから県に問い合わせしてみた。すると近くの僧が、死者に敵も味方もないと弔ったのが発端で、近年には在日米軍関係者が慰霊祭に招かれて来ると、新聞記事のコピーをいただいた。

平和への祈りと鎮魂の碑を見たことで、忘れられない旅になった。

今回も温泉であたたまりながら、地域で女性会館づくりを手を貸している人、介護の仕事を「基本給二十万よ」と続けている人、時給八百五十円の掃除のパートをしながら原稿書きをしている人、さまざまな人に会えた。

前回は娘の結婚の話が出たが、今回もそうだった。親が非婚を選んだのに、娘は世間並みの結婚をしたという話だった。

離婚した人の再婚の話もあった。

参加者にはレズの人もある。

それぞれの目的に、自己の性と健康への決定権を模索してきた証し。

「リブって何でしたっけ」というほど両性が対等な文化を築ける日が、待ち遠しい。
(飯岡祐保)

次回リブ合宿のお知らせ

◆二〇〇二年三月十六日(土)夕方から十七日(日)午前中まで

◆南紀勝浦温泉「中の島」(予定)

◆費用 一万五千元位(交通費別)

今回は、今までの「自己紹介」から一歩踏み出して、テーマを募集します。

出欠とテーマを下記にお知らせください。

〒560・0023 豊中市岡上の町三・三・二四

フリーク気付「リブ温泉合宿幹事会」

FAX 0729・63・3981 (松尾)

Eメール s609fr@nifty.com (示村)

語りかけたいあなたへ

38

大里知子

今、Eメールが面白い

今年も早いもので、もう半年が過ぎてしまった。

今まで肌寒い日が多くて、これからまた一挙に夏の暑さになったら、いったい身体の方はどうなってしまうのだろうか、近頃は自分の身体のことばかり考えてしまっている。

今月は、文月。二三（ふみ）日には、毎年郵便局で文の日にちなんだ特殊切手が発売される。でも、近頃は携帯電話や電子メールの普及で、手紙離れの人も多いと聞く。

私も、七月に入ってから時代の波に乗って、電子メールなるものを始めた。始めたと言っても、甥の健の細かい指導を受けてメールの送受信だけ、やっとやれるようになった程度のものだ。

コンピューターにくわしい健は、私が今使っているワープロをやりやすいようにしてくれたの

で、今度も「Eメールがやってみたいから、私にできそうなものを捜してみて」と、頼んでおいたら、五月に健からノートパソコンが送られてきた。「五月末に出張で仙台まで行くから、その帰りに寄って細かいことを教える」ということで、五月末の土日に文字どおりの特訓を受けた。

その結果、マウスにボール紙をかぶせて、そこをワンタッチで押すだけで、すべてのことができてしまう、私にピッタリ合ったパソコンで、Eメールの送受信だけ、どうにかできるようになった。まだまだ知らないことはたくさんあるけれど、今、完全にEメールのとりこになってしまっている。

Eメールは、送りたい文章を印刷しなくても、印刷したものを封筒に入れて、郵便として出さなくても、電話回線を使って送りたい相手のパソコンや携帯電話に、一瞬にして送られるという、まさに何をすることも自分一人では出来なくなった私に、ピッタリの便利なもの。今のうちは、もっぱらわからないことを聞くことで、甥の健と送受信をおこなっている。

そのうち慣れてきたら、あつちにも、こつちにもと、送信したい人の顔を思い浮かべては、自然にほほの筋肉をゆるませている。

(二〇〇一・七・三三)

Eメールアドレス

fusen@abeam.ocn.ne.jp

〈あじろ〉は、人と人とが出会うひろば——

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……。心おきなく話し合える仲間がいる……。そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あじろ」を軸に、よりよい自分と社会を目指す、ゆるやかな連帯。「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊「あじろ」の誌代込みで月額七百円。一年分前払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は一千円。ハガキかFAX、電話を頂ければ、申し込みカードをお送りします。

〈BOOK〉の登録も、ぜひ……

一九六〇年に生まれた〈BOOKバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬を、ご連絡ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ただし、半年以上〈あじろ〉会員のの方に限ります。

連絡先

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル
03-3354-3941 FAX 03-3354-9014
Eメール XLV05467@niftyserve.ne.jp

●発行2001年9月10日

あごら 269号 参院選をたたかって

●編集 あごら新宿

●発行所 あごら編集部 〒160-0022 東京都新宿1-9-4

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体785円+税 ●振替 00100-0-5264



9784893061164



1920036007851

ISBN4-89306-116-X

C0036 ¥785E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体785円+税

企画・編集・翻訳…

何でもご相談ください

創業1960年

女性専門職集団

BOC

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 ☎3354・9014

E-mail XLV05467@nifty.ne.jp.

NPOウイン女性企画

〒460-0008 名古屋市中区栄3-28-2

☎052-251-9109 ☎261-8778

自分をみつめて いきいき生きる

自立の心理学

しま・ようこ編
1「コミュニケーションと自立

¥1890

「お上」の正体を考える

しま・ようこ
自立の心理学教室

¥883

再び「お上」を考える

しま・ようこ
自立の心理学教室

¥810

「安全」つてなあに？

しま・ようこ
自立の心理学教室

¥1300

私たちが「安全」をつくる

しま・ようこ
自立の心理学教室

¥957

「加害」と「被害」を考える

しま・ようこ
自立の心理学教室

¥810

自分を変える本

リン・ブルーム／カレン・コバーン
ジョン・パールマン共著 斎藤千代訳

¥1545

この ひろい宇宙に
たった一つの地球

その 大きな地球に
たった一人のわたし
そして あなた

かけがえない地球

かけがえないわたし

かけがえないあなただから
たいせつにたいせつにしよう

あなたも

わたしも

地球も

たった一度の人生

たった一つの地球

だから

思いきりのびやかに生きよう

だれもが だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと
ほほえみあえる地球にしよう

へあごら

へあごら

人と人の出会うひろば

へあごら

人と人の共に生きるひろば